

現代文問題集②

【物語文特化編】

澁日莊

目次

【第一問】	石の時間、木の時間	… 2ページ
【第二問】	星が降りた日	… 9ページ
【第三問】	白い浜にて	… 17ページ
【第四問】	水辺の影	… 26ページ
【第五問】	廃坑の声	… 36ページ
【第六問】	贗作の真実	… 50ページ
【第七問】	稜線の灯(りょうせんのみ)	… 65ページ
【第八問】	路地の風	… 76ページ
【第九問】	食卓の記憶	… 86ページ
【第十問】	学校と未来	… 94ページ
おわりに		… 121ページ

【第一問】石の時間、木の時間 — 「時間」は誰にとって流れているのか？

私たちは日々、時間に追われている。「あと一分で電車が出る」「明日の締切に間に合わない」「年を取るのが早い」といった言葉に表れるように、時間はまるで背後から私たちを押し立てる存在のように感じられる。しかし、このような感覚は、本当に「時間」というものの本質を表しているのだろうか。

人間が「時間」と呼んでいるものは、実際には非常に主観的な経験である。幼い頃の一日は果てしなく長く、年齢を重ねるにつれて季節の移ろいすら一瞬の出来事に思えるようになる。楽しいときには時が経つのが早く、苦しいときには一秒が永遠にすら感じられる。このように、時間とは客観的な「ものさし」ではなく、体験に基づいた「感覚」であると言えるかもしれない。

しかし一方で、私たちは「時計」という装置によって時間を計り、それを共有可能な尺度として用いている。時間割、タイムカード、ダイヤグラム——こうした制度や装置によって「時間」は社会の中に組み込まれていく。ここでは、「一分は誰にとっても一分である」という前提が支配している。

だが、その「客観的時間」が、すべての生き物に等しく適用できるわけではない。たとえば、樹齢何百年という木々は、私たちの時間とはまったく異なるスケールで生きている。一本の巨木がゆっくりと幹を太らせ、枝を広げていく過程は、私たちの人生から見れば悠久の営みに見える。一方、岩や石の「時間」はさらに異質である。何千年、何万年をかけて風化し、割れ、砂となっていく。人間の目には、もはや時間の「停止」とすら思えるその在り方も、確かに「流れて」いるのだ。

こうして見ると、「時間が流れる」とは、私たち自身の変化と結びついた認識であるように思われる。変化があれば時間を感じ、変化がなければ時間は意識されない。私たちが「時間が速い」「遅い」と感じるのも、その変化の速度に自らの感覚を重ねているからだ。つまり、「時間」は、私たちの側に属している。

このような見方をさらに深めると、「時間」とは“意識の現象”であるとすら言え

る。哲学者アンリ・ベルクソンは、「時間には二つの顔がある」と述べた。一つは時計によって測られる“均質な時間 (temps)”、もう一つは私たちが経験する“持続 (durée)”としての時間である。持続とは、記憶と感情とが折り重なり、絶え間なく変容する「主観的な時間」のことだ。たとえば、ある人にとっての「10年間」と、別の人にとってのそれが、まったく異なる重みや厚みを持つているように、私たちは「同じ時間」を生きているようでいて、実は異なるリズムで生きているのかもしれない。

この考えをさらに拡張すれば、石や木にも「それぞれの時間」があると考えることができる。もちろん、彼らには人間のような意識や言葉はない。しかし、それぞれの存在が持つ固有のリズム——たとえば、木が芽吹くタイミングや、石が割れる周期のような——を通じて、「時間」が内在していると見ることはできないだろうか。もしそうであるならば、「時間」とは客観的に流れるものではなく、すべての存在が自らの速度で「生きている」という現象そのものなのかもしれない。

科学の世界では、こうした複数の時間を「時間スケール」として扱うことがある。たとえば地質学は数千万年という単位で過去を振り返るし、物理学では宇宙の膨張にかかる兆年スケールの時間が議論される。逆に、素粒子の世界では、一秒の兆分の1という単位で変化が起こっている。これらはすべて「時間」と呼ばれながら、体感としてはあまりに異なる。つまり、「時間」という言葉は、私たちが思う以上に多義的で、立場や視点によってその意味を変える曖昧なものなのである。

現代社会は、このような多様な「時間の在り方」を忘れがちだ。効率化やスピードが重視されるなかで、私たちは「人間にとっての時間」だけに焦点を当ててしまふ。しかし、山の奥で数百年をかけて大きくなる木や、風に削られながら黙して在り続ける岩の姿を想像するとき、私たちは「急がなくてもよい時間」の存在にふと気づかされる。

「誰のために流れているのか？」という問いを立てることは、自分が今、どのような時間を生きているのかを問い直すことでもある。人生を「早く終わらせるため

の競争」にしてしまうのか、それとも「味わうことの連なり」として捉えるのか。その違いは、時間そのものではなく、それを生きる私たちの意識のあり方にかかっている。

そして、もし私たちが石や木の時間に耳を傾けることができたら、「生き急がなくてよい」という新しい価値観が芽生えるかもしれない。時間は誰かの背中を押すためだけにあるのではない。静かに在るものに、そっと寄り添うために流れている時間も、確かにあるのだ。

【参考文献・関連書籍】

- ・ アンリ・ベルクソン 『時間と自由』 (岩波文庫)
- ・ 鷺田清一 『じぶん・この不思議な存在』 (講談社現代新書)
- ・ 中沢新一 『哲学の東北』 (幻冬舎)
- ・ 養老孟司 『唯脳論』 (ちくま学芸文庫)

設問

問一 次の語句の意味として最も適切なものを、それぞれの選択肢から一つ選びなさい。

(一)「悠久の営み」(第4段落)

ア はるか遠くに続く苦勞の連続

イ 非常にゆっくりとした動作の繰り返し

ウ 長い時間をかけて静かに続く活動

エ 終わりの見えない無意味な努力

(2)「持続 (duree)」(第6段落)

ア 一定の間隔で繰り返される周期的な時間

イ 記憶と感情が折り重なり、変化し続ける主観的な時間

ウ 社会で共有される標準的な時間の単位

エ 意識を持たない存在にのみ適用される自然的な時間

(3)「多義的」(第8段落)

ア 多くの人が支持しているという意味

イ 一つの言葉に多くの意味が含まれていること

ウ 義務を多く課せられている状態

エ 複数の学問分野にまたがる知識のこと

問二 筆者は「時間」について、どのような対比的な見方を提示しているか。以下のうち最も適切なものを選びなさい。

ア 時間には過去と未来という二つの方向があること

イ 時間には主観と客観という二つの側面があること

ウ 時間には速さと遅さという感覚的違いがあること

エ 時間には動物と植物の違いが表れていること

問三 筆者がベルクソンの思想を紹介する中で、「主観的な時間」の特徴を表している箇所を、本文中から二十五字以内で抜き出しなさい。

問四 筆者は「石や木の時間に耳を傾けること」（最終段落）について、どのような意義があると述べているか。本文の内容に即して、四十字以内で答えなさい。

問五 あなた自身が「時間」について印象的に感じた経験や考えを、本文の内容をふまえながら百字以内で述べなさい。

【解答・解説】

問一 語彙理解

(1) 正解：ウ

解説：「悠久」は「非常に長く続くこと」、「営み」は自然や人間の活動を指す。本文では木の成長を喩えた表現であり、「長い時間をかけて静かに続く活動」が最も適切。

(2) 正解：イ

解説：ベルクソンの「持続 (duree)」は、時計では測れない主観的な時間のこと。本文にも「記憶と感情とが折り重なり…」とある。

(3) 正解：イ

解説：「多義的」は「多くの意味を持つこと」。本文では「時間」という語が立場によって異なる意味を持つ点を説明する際に用いられている。

問2 正解：イ

解説：本文全体は「主観的時間」と「客観的時間」の対比に貫かれており、ベルクソンの引用もこの構造を裏付けている。

問3 正解例：「記憶と感情とが折り重なり、絶え間なく変容する」

解説：「主観的な時間」の定義として最も核心的な文。第○段落に明記されており、二十五字以内で要件を満たしている。

問4 模範解答例：

生き急がずに在ることの価値を知り、時間の多様なあり方に気づくきっかけとなる。

(38字)

別解例：

- ・ 「急ぐ」時間以外の生き方を想像し、自分の意識のあり方を問い直す契機となる。

- 静かに在るものにも時間があると知ること、新たな価値観を得られる。
- 時間を自分の速度で生きる視点を得て、人生を味わう姿勢が芽生える。

自己採点チェック..

- 石や木の時間に触れることで得られる「価値」や「気づき」が記述されているか
- 文として自然に読める構成になっているか（主述の対応、接続語など）
- 30字以内に収まっているか

問5 模範解答例..

田舎の祖父母と田植えをして過ごした数時間が、記憶に残っている。短い時間だったが、温もりや声、空気の感触がはつきりとよみがえる。そのとき感じた「時間」は、時計の針では測れない厚みを持っていたように思う。(100字)

別解例..

- 受験勉強に追われていた時期は、毎日が速く過ぎ去っていた。しかし試験が終わった瞬間、急に時間が止まったように感じた。感情の有無によって、同じ時間でも全く違って感じられることを実感した。
- 森を歩いていると、静けさの中で時間が止まったように感じることもある。木や風の音の中に、日常とは違う「流れ方」があるように思えて、自分のペースを取り戻せる気がする。
- 病院で祖母の最期を看取ったとき、わずか30分がとても長く、重かった。「時間」は長さではなく、心の動きとともにあると気づいた。(やや内容不足の例のような「心の動き」だったのかなどを加えるとよし)

自己採点チェック..

- 自分の具体的な経験または考えが書かれているか
- 本文の視点（主観的時間・時間の多義性など）と関連づけられているか
- 内容が百字以内におさまり、読みやすい表現になっているか

【第二問】星が降りた日

あの日、僕は小さな光を見た。

それは夜明け前の薄明の中、畑の裏の空き地に落ちていた。小さな石だった。だけど、ただの石じゃないと、すぐにわかった。触れると、まだほんのりと温かく、きらきらと黒い粒子が光の加減で瞬いた。まるで、夜空の一部がこぼれ落ちたようだった。

「これ、もしかして……流れ星のかけら？」

誰かに言いたくて、僕は朝の支度もそこそこに、ポケットにその石を入れて家を出た。石は小さくて、親指の先ほどの大きさしかなかったけれど、妙にずっしりと重たかった。

教室ではいつも通りのざわめきが始まっていて、僕はつい、唐突に口に出してしまった。

「流れ星、拾ったかもしれない！」

「は？何言ってるの、拓也」

一番に反応したのは、クラスで目立つ存在の圭太だった。彼は笑いながら僕の方に近づいてきた。

「おまえ、朝からポエムか？それとも宇宙人と交信でもしてるのかよ」

まわりがどっと笑った。でも、僕はおかまいなしに、机の上にそっと石を置いた。

佳乃だけが目を丸くして、机に身を乗り出してきた。

「ほんとに？見せて！」

佳乃はクラスでも理科好きで有名だった。静かだけど芯が強く、理科室で植物の世話をしている姿を何度か見かけたことがある。

「……なんか、違う。ふつうの石とは、違う気がする」

彼女がそう言ったとき、教室の空気が少し変わった。圭太が苦笑いしながら、手を伸ばして石をつまみあげた。

「どれどれ？——って、これ、マジでちよつとカッコいいな」

僕はホツとした。けれど、次の瞬間、圭太が冗談めかして石を黒板の方へ放り投げた。

「おいっ！」

佳乃の声が鋭く響いた。

幸い、石は黒板の下のチョーク入れに当たって止まった。僕は慌てて拾いに行つた。割れていなかったのが救いだつたが、僕の胸の奥で何かチリリと鳴った。何かが崩れたような気がした。

そのあと、佳乃がこっそり僕に言った。

「理科室、行こうよ。先生に見せてみよう」

昼休み、僕と佳乃は理科室を訪ねた。

白衣の理科の先生はひげを撫でながら、顕微鏡で石をのぞきこんだ。

「ふむ、磁鉄鉱に似ているけど……この表面の焼けたような質感は、大気圏を通つたときの痕かもしれないな」

「じゃあ、ほんとに宇宙から？」

先生は首をかしげたまま、しばらく石を転がして見ていた。

「証明は難しい。でもね、地球ももともとは宇宙のかけらだ。こうして石が降るのも、時間をかけて命が生まれるのも、全部同じ連なりの中にあるんだよ」

先生の言葉が妙に深く響いた。

午後の授業中、僕は先生の言葉を何度も頭の中で反芻していた。「宇宙のかけら」「命が生まれる」「同じ連なり」……。黒板の文字はほとんど頭に入つてこなかった。

僕の心は、まだあの空き地に落ちていた石と、その先の宇宙をさまよっていた。

放課後、佳乃が校舎の裏に誘ってきた。

誰もいない中庭のベンチに腰掛けて、ふたりで石を見つめた。

「証明できないけど、本物かもしれないって、すごいね」

「うん。でもさ、たとえ本物じゃなくても、あれを見たときの気持ちは本当だった。

何か、大きなものに触れた気がしたんだ」

「……私ね、星になりたかったんだ。ちっちゃい頃」

「え？」

「ずっとひとりではつんと光ってて、でも見てる人がいるっていうのが、いいなって」

それは、少し切ない告白だった。だけど、すごく静かな光を持っていた。

僕はうなずいた。わかるような気がした。

その帰り道、校舎の影から夜空を見上げた。空はもう星でいっぱいだった。

あの石が本当に星のかけらかは、わからない。でも、あれに触れたとき、自分の中にも何か火が灯ったような気がした。

「僕らも、星の続きなんだよな」

「……うん、そうかもしれないね」

その瞬間、ふたたび空から一筋の光が流れた。

それが何を意味するのか、僕らにはわからなかった。けれど、心のどこかが、確かに応えていた。

設問

問一

次の語句の意味として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選びなさい。

・「反芻していた」

ア 繰り返し思い出して考えていた

イ まったく理解できずに混乱していた

ウ 他人の考えをなぞっていた

エ 現実から逃げるように忘れようとしていた

問二

次の内容として、本文の描写にもっとも合致するものをア～エの中から一つ選びなさい。

ア 拓也はクラスメートに嘘をからかわれたことを根に持って、石を隠してしまっ
た。

イ 佳乃は理科が苦手だったが、拓也の話に興味を持ってついでにきた。

ウ 拓也と佳乃は、石が本当に流星のかけらかどうかよりも、それを通じて感じた
ことを大切にしていた。

エ 理科の先生は科学的な視点だけで石を判断し、心の動きには興味を示さなかつ
た。

問三

次のうち、佳乃の人物像として最も適切なものをア～エの中から一つ選びなさい。

ア 周囲に合わせて行動するが、本心は隠している

イ 目立たないが、感じたことを正直に言葉にできる

ウ 理屈よりも感情を優先し、科学には関心がない

エ 好奇心はあるが、自信がなく発言をためらうことが多い

問四

理科の先生が「地球ももともとは宇宙のかけらだ」と言った場面について、筆者がこの言葉に心を動かされた理由を、本文の内容に即して**五十文字以内**で書きなさい。

問五

佳乃が「星になりたかった」と語ったときの思いを、**三十字程度**で説明しなさい。

問六

仮にあなたがこの物語の主人公だったとして、「星のかけら」を手にした経験を通じてどんなことを感じ、考えるか。本文の内容をふまえて**百三十字以内**で自由に述べなさい。

解答・解説

問一（語彙理解）

正解…ア

解説…

「反芻」とは、本来は草食動物が一度飲み込んだものを再び口に戻して嚙む行為。比喩的に、人が**何度も繰り返して考えたり思い出したりすること**を表す。本文でも、理科の先生の言葉をじっと噛みしめるように思い返している場面で使われている。

問二（内容把握）

正解…ウ

解説…

本文の描写から、拓也と佳乃は「石の正体」よりも、それにふれたときの**感覚や意味、内面の火を大切にしていたこと**がうかがえる。ア・イ・エはいずれも本文の流れと異なる、あるいは描写が存在しない。

問三（人物像の理解）

正解…イ

解説…

佳乃は、周囲に流されずに*「違う気がする」*と自分の感覚を言葉にできる人物。また、植物の世話や星への想いなど、静かで芯のある性格が描かれている。ア・ウ・エはそれぞれ人物像としてずれている。

問四（記述問題①：50字以内）

模範解答例…

宇宙からの石と自分自身がつながっている感覚を得て、命や存在が広い連なりの

中にあると感じたから。(47字)

別解例..

- 自分の身近な体験が宇宙や生命のスケールに重なり、世界へのまなざしが変わったから。
- 石にふれた不思議な感覚が、先生の言葉によって意味づけられ、自分の存在にもつながったから。
- 石をきっかけに、自分も宇宙の一部だと思えて、見ていた世界が広がったように感じたから。

自己採点チェック..

- 宇宙・生命・存在と自分とのつながりを感じた理由になっているか
- 具体的な場面との対応が取れているか(理科の先生の言葉に触れているか)
- 50字以内で簡潔にまとまっているか

問五(記述問題②:30字程度)

模範解答例..

孤独でも誰かの心に残るような、静かな存在になりたかったから。(30字)

別解例..

- 離れていても誰かに見つめられる、光る存在にあこがれていたから。
- ひとりでも意味を持てる存在に、幼い頃から惹かれていたから。
- 自分の居場所を空に投影するような、さみしさと憧れがあったから。

自己採点チェック..

- 「星になりたかった」という心の背景や理由が描かれているか
- 佳乃の性格やセリフと矛盾しない内容になっているか
- 文法的に自然で、25~35字程度に収まっているか

問六（自由記述問題：130字以内）

模範解答例..

「星のかげら」が本当に宇宙から来たかどうかは重要ではなく、それにふれたとき、世界の見え方が変わったことが大事だと思う。日々の暮らしの中にも、自分の中にも、広い宇宙とつながる瞬間があることを知って、何気ない時間が少しずつ光を帯びて見えるようになった。（124字）

別解要素例..

- 石を見て感じた不思議な気持ちは、自分にも「星の続き」があると信じさせてくれた。
- 身近な場所にある小さな出来事が、こんなにも自分の意識を変えるなんて思わなかった。
- 石の正体よりも、それを通して誰かと語り合えたことが、きっとかけがえのない記憶になる。

自己採点チェック..

- 主人公の立場からの実感がこめられているか
- 石や星、生命や宇宙などの本文の主題とつながっているか
- 自由な表現になっていて、130字以内に収まっているか

【第三問】 白い浜にて

浜辺に、朝の光が差していた。潮騒の音が、まだ眠りの残る街をゆっくり撫でて
いる。

僕は、ここに立つたびに思う。なぜ、これほど世界は静かで美しいのに、僕の手
は血で染まってしまったのか、と。

五年前の夜。酒に酔っていた。些細な口論だった。気がついたら、僕は相手を押
し倒し、拳で殴り続けていた。息が途切れるまで。

あの手を伸ばさなければ。あの声を振り切らなければ。

過去は消えない。僕が人を殺めたという事実も、刑期を終えてなお影のようにま
とわりつく。

町の人々は僕を「出所したあの男」と呼ぶ。直接の声は聞こえなくても、視線が
そう告げている。商店で買い物をすれば、硬い笑みで釣銭を差し出される。子ども
が近づけば、母親は腕を引き寄せる。

「更生」という言葉を、僕は信じ切れないままにいる。赦される日など来るのだ
ろうか。

そんなある朝、浜辺で一人の少年に出会った。中学生くらいだろう。制服の裾を
濡らしながら、必死に砂を掘っている。

「何をしているんだ」

声をかけると、少年は驚いた顔をし、すぐにうつむいた。

「……カメの、卵を探してるんだ」

「産卵の季節じゃないだろう」

「でも、ここで見たっていう人がいたから」

彼は頑なだった。僕は思わず、しゃがみ込んだ。小さな手が砂をかき分けるのを
眺めながら、ふと自分の手を見下ろした。爪の隙間に、もう砂以外のものが入り込
まないように、と。

卵は見つからなかった。けれど、彼は帰り際に笑った。

「ありがとう。手伝ってくれて」

僕は言葉を返せなかった。ただ、その笑顔が胸の奥で痛むように響いた。夜、狭い部屋で横になる。眠れない。天井のしみがぼやけて見える。

あの少年の声が耳に残っていた。

——ありがとう。

そんな言葉を、どれほど久しく受け取っていなかっただろう。

翌日も浜に出ると、少年がいた。今度は空き缶を拾っていた。

「卵は見つからなかったから……せめて、きれいにしようと思って」

僕も無言で拾い始めた。風に吹かれて砂が舞い上がる。足跡が、波にさらわれていく。

少年がふと僕を見上げて言った。

「人を殺したら、もう戻れないのかな」

心臓が凍るようだった。

「どうしてそんなことを？」

「ニュースで見たんだ。……それで、ちょっと考えて」

僕は答えを探した。けれど、見つからなかった。

「……戻れるかどうかは、わからない。でも——」

言葉がつかえた。

「でも、戻りたいと思うことは、できる」

彼は静かに頷いた。その瞳には恐怖の色はなく、ただ深い問いを映していた。

数日後、町の老人に呼び止められた。漁に出る準備をしていたその人は、網の修理を手伝ってくれと言う。

僕は無言で頷いた。針と糸を手に取り、裂けた網を縫い合わせる。老人の手は震えていた。僕の手は迷わなかった。

「器用だな」

短い言葉だったが、僕には重かった。

僕は過去の自分の手を思い出す。暴力に染まった手が、今は綱をつなぎ合わせている。

その日、雑貨屋で真美に声をかけられた。漁師の娘で、昔からこの町を支えている女性だ。

「浜をきれいにしてくれてるんでしょ。助かってるわ。子どもたちが裸足で走れるもの」

僕は頷くだけだった。けれど、その言葉が胸の奥で小さな灯をともした。

夜、眠りにつこうとしても、過去が押し寄せてくる。殴った拳の感触、崩れ落ちる体。血の匂い。

僕はシーツを握りしめた。

——おまえが奪った命は、戻らない。

その声が、耳の奥で囁いてくる。

それでも翌朝、浜に出た。少年がまたいた。今度はノートを広げて、何かを書きつけていた。

「何をしてるんだ」

「カメのこと、調べてる。産卵の時期とか、海の温度とか」

彼は真剣だった。僕はふと笑ってしまった。

「本気だな」

「うん。いつか、本当に卵を見つけないんだ」

彼の横顔を見ながら、僕は思った。

——この子には、未来がある。

やがて季節が移ろい、夏が来た。

海水浴客が増え、浜は賑やかになった。だが、僕に近づく者はほとんどいない。

それでも僕は掃除を続けた。空き缶や流木を集め、錆びた釘を取り除いた。汗でシャツが張り付く。波打ち際に立つと、空が眩しかった。

ある日、真美が冷たい麦茶を差し出した。

「無理しないでね」

僕は受け取って、口を湿らせた。

「……俺がやっていいのか、わからない」

「いいか悪いかなんて、誰が決めるの？」

彼女は真っ直ぐな眼差しを向けた。その光が僕の胸を突き刺した。

夜、浜に腰を下ろす。潮風が頬を撫でる。

本当に変わるのか、と波が問いかけてくる。

僕は砂を握りしめた。そこに血の色はなかった。

月明かりに照らされた白い浜が広がっていた。

少年の笑顔、老人の言葉、真美の眼差し。

過去は消えない。けれど、未来に触れることはできる。

潮騒が静かに碎ける音を聴きながら、僕は初めて、深い眠りに落ちていった。

設問

問一

次の語句（本文傍線部）の意味として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選びなさい。

(一)「赦される日など来るのだろうか」

ア 罪を問われずに忘れ去られる

イ 許しを受けて心が解き放たれる

ウ 裁判で無罪を勝ち取る

エ 償いをせずに済ませる

(二)「頑なだった」

ア 強情で簡単には考えを変えなかった

イ 不安で声が震えていた

ウ 素直で信じやすかった

エ 体が硬直して動けなかった

(三)「胸の奥で小さな灯をともした」

ア 心臓が急に苦しくなった

イ 希望や温かさが生まれた

ウ 過去の記憶が鮮明に蘇った

エ 緊張で息が詰まった

問二

本文の内容として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選びなさい。

ア 主人公は石を拾った少年を危険だからと遠ざけた。

イ 町の人々は主人公を全面的に受け入れ、信頼した。

ウ 主人公は過去を背負いながらも、人々との交流を通じて少しずつ変化していった。

エ 真美は主人公を避け続け、最後まで心を閉ざした。

問三

真美の人物像として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選びなさい。

ア 他人を裁くことに厳しく、過去を許さない性格

イ 静かに人を見守り、必要なときに温かい言葉をかける性格

ウ 子どもっぽく無邪気で、責任感を持たない性格

エ 外見は明るいが、内心では主人公を恐れていた性格

問四

少年が「人を殺したら、もう戻れないのかな」と尋ねた場面で、主人公が「戻りたいと思うことは、できる」と答えた意味を、本文の内容に即して**四十字程度**で説明しなさい。

問五

主人公が「砂を握りしめた。そこに血の色はなかった」と描写された場面は、どのような心境を象徴しているか。**三十字程度**で説明しなさい。

問六

あなたがもし主人公の立場だったなら、この町での経験を通して「更生」という言葉をどう捉えるか。本文の内容をふまえて**百二十字程度**で自由に述べなさい。

解答・解説

問一（語彙）

(一) 正解…イ

解説…「赦される」は、罪を帳消しにされるのではなく、許しを受けて心が解き放たれる意味。本文では主人公の切実な願いとして描かれている。

(二) 正解…ア

解説…「頑な」は意志が固く、容易に考えを変えないさま。本文の少年が、卵を探し続ける態度を表している。

(三) 正解…イ

解説…「小さな灯をともした」は、心に希望や温かさが芽生えることの比喩表現。真美の言葉によって主人公の心に変化が生じた場面。

問二（内容把握）

正解…ウ

解説…主人公は町の人々の視線に苦しみながらも、少年や老人、真美との交流を通じて少しずつ変化していった。ア・イ・エはいずれも本文と異なる。

問三（人物像の理解）

正解…イ

解説…真美は、主人公を責め立てることなく、静かに見守りつつ温かい言葉をかける存在として描かれている。ア・ウ・エはいずれも本文の人物像と一致しない。

問四（記述問題①：40字程度）

模範解答例…

罪を消すことはできなくても、過去を悔い、未来へ向けて生き直そうとする意志を持てるから。(43字)

別解例..

- 人は完全には過去を変えられないが、変わろうとする心は持てるから。
- 取り返せない罪を背負っても、更生を願う気持ちは誰にも奪えないから。
- 過去の赦しはなくても、未来を見つめ直す希望は残されているから。

自己採点チェック

- 過去の罪が消えないことを前提にしているか
- 「戻りたいと思う意志」を核心にしているか
- 35～45字前後で自然にまとまっているか

問五（記述問題②：30字程度）

模範解答例..

過去の罪を負いつつも、今は穏やかに新しい歩みを始められる安堵。(31字)

別解例..

- 暴力の記憶を手放し、罪を超えて生きたいという希望。
- 血に染まった手が今は清らかであることへの静かな実感。
- 過去を消せないが、未来は変えられるという決意。

自己採点チェック

- 血がない⇨過去の暴力と対比されていることを示しているか
- 主人公の心境の変化を象徴として表現できているか
- 25～35字前後で簡潔にまとまっているか

問六（自由記述問題：200字以内）

模範解答例..

更生とは、過去をなかったことにすることではないと思う。罪の事実は消えず、背負い続けるしかない。だが、人との出会いや小さな行いを重ねる中で、未来を新しくつなぐことはできる。更生とは、赦される日を持つことではなく、自ら希

望を育てていく営みなのだ。(121字)

別解要素例..

- 更生とは罪を忘れることではなく、誰かと関わりながら未来を作り直すことだと感じた。
- 過去を抱えたままでも、善い行いを積み重ねる中で、自分を少しずつ変えられると知った。
- 人に赦されることより、自分自身が変わろうとする心を持つことが更生だと考える。

自己採点チェック

- 過去を消せないが未来を変える、という本文のテーマと結びついているか
- 「更生」を主人公の立場から具体的に捉えているか
- 120字程度に収まり、自然な流れで表現できているか

【第四問】水辺の影

私がこの町に戻ったのは、戦の砲声が遠い記憶となり、人々の耳に残るのは未だ消えぬ余震のようなざわめきばかりであった。

駅舎の瓦は割れ、壁には弾痕が残り、道を行き交う人々の顔は、どこか乾いた影を帯びていた。私はその群れの一人となりながら、胸の奥で絶えず問いかけていた。

——私は、ここに生きる資格があるのか。

旧家の屋敷は、荒れ果てていた。石垣の継ぎ目からは雑草が伸び、雨に打たれた木戸は反り返っていた。祖父の代に建てられた洋館めいた建物は、外壁の漆喰が剥がれ、窓は曇りガラスのように白んでいる。

廊下を歩くと、板の軋む音が背後からついてくる。私はその不気味さを、むしろ懐かしさのように受け取った。——この寂寥は、私に似合っている。

暮らしを整えるといっても、日々の糧は乏しかった。昼間は川辺に出て、流木を拾い、庭で焚き火をして簡素な食事を作る。夕暮れになると、川のほとりに腰を下ろし、水面に映る影を眺めるのが常であった。

その影は、かつて私が関わった争いの残像と重なった。

砲煙の中で響いた叫び、崩れ落ちる人影、血潮の匂い——。いまなお私の眼裏に焼き付いて離れぬ。

そんなある日、旧友の島村が訪ねてきた。

「帰っていたのか」

彼は痩せ、目の下に深い隈を刻んでいた。上京して画家を志したが、戦乱で居場所を失い、この町に戻ってきたらしい。

「芸術など、結局は何の役にも立たぬ」

彼は机に置いた安酒の盃を傾け、吐き捨てるように言った。

「人は殺し合いをやめない。絵は燃やされ、詩は踏みにじられる。それでも、私は描かずにはいられない」

私は答えた。

「役に立つか否かを問うことが、芸術を殺すのではないか」

島村はしばらく黙り、やがて窓外の川を見やった。冬に近づく空気の冷たさの中で、水面がかすかに揺れていた。

夜更け、私は眠れぬまま机に向かった。蝋燭の炎が頁を照らす。紙の白さは、私の心の暗さをより際立たせる。

——芸術とは、果たして人を救い得るものなのか。

筆を取っても、言葉は震えて定まらない。私はただ、波紋のように広がる空虚を抱き続けていた。

翌日、私は町の古書店に足を運んだ。

狭い路地にひっそりと佇むその店は、古びた木の扉が軋み、薄暗い奥からは紙と埃の匂いが漂っていた。棚には色あせた全集や、頁の端が黄ばみかけた文芸誌が無造作に積み上げられている。

店主は七十に届こうかという老人で、背は痩せ、声は乾いた風のように細かった。

「君の祖父も、よくここに来ていたよ」

そう言いながら、彼は奥の棚から一冊の詩集を差し出した。

「この詩人は戦場に赴き、帰らぬ人となった。だが、その言葉はいまもここに残っている」

私は頁を開き、ざらついた紙の手触りに指を滑らせた。インクは褪せ、ところどころ掠れていたが、そこに刻まれた言葉は、なお鮮やかに心を突き刺してくる。

「争いは、人を奪う。しかし芸術は、奪われてもなお残る」

老人の言葉は低く、しかし確かに響いた。

私は思わず尋ねた。

「……芸術は、人を救えるのでしょうか」

老人はしばし沈黙し、窓辺の光を見つめた。

「救う、とは何かね。死んだ者を蘇らせることではあるまい。ただ、生き残った者

が、その影を忘れぬための手立てにはなろう」

私はうなずいた。だが胸の奥には、言い知れぬ痛みがじんわりと広がっていた。その夜、夢を見た。砲煙の立ちこめる中で、誰かが詩を朗読している。だが声は途中で途切れ、闇の中に沈んでいった。私は耳をふさいだ。

目を覚ますと、夜明け前の川辺に立っていた。冷たい風が吹き抜け、水面にはまだ薄い月の影が残っていた。

私はその影を見つめながら、心の奥底で囁く声に抗えなかった。――芸術は争いの血を洗えるのか。

その日、川辺で一人の女性を見かけた。

髪を後ろで束ね、淡い絹のスカーフを首に巻き、膝に写生帳を広げていた。鉛筆の音がかすかに風に溶け、紙の上には揺れる木の影が描かれていた。

「何を描いているのですか」

声をかけると、彼女は穏やかに笑った。

「影です。光を描くのは誰にでもできます。でも影は、心を映すんです」

私はその言葉に立ち尽くした。

――影。

その一語が、私の胸を深く抉った。

彼女の名は美代といった。

以後、私は幾度となく川辺で彼女と顔を合わせた。彼女は写生帳に影を描き続け、私はその傍らに立って言葉を交わした。

「あなたは、なぜ影を描くのですか」

ある日、私は問いかけた。

美代は鉛筆を止め、少し空を仰いで答えた。

「光だけでは嘘になるからです。争いも、孤独も、影のようにいつもついて回るでしょう。私はそれを見逃したくない」

彼女の声は静かだった。しかし、その静けさの奥には烈しい意志が潜んでいた。

私は思わず、自分の過去を語りかけそうになった。だが、言葉は喉の奥で止まった。――罪を負った人間に、芸術を語る資格はあるのか。

島村は相変わらず我が家に通い、夜ごと酒をあおった。

「美代とかいう女に惹かれているのだろう」

彼は盃を傾けて嘲るように言った。

「芸術家は皆、孤独だ。だが孤独が人を救うことなどない。むしろ自らを焼き尽くすだけだ」

私は反発した。

「焼き尽くされても、描かずにはいられぬ心がある。それが芸術ではないか」

「ならば問う。争いの渦中であって、芸術が一人の命を救った例を知っているか」

私は答えられなかった。島村は冷笑し、盃を空にした。

その夜、私は美代の描いた影の絵を思い浮かべた。

――救えぬかもしれぬ。だが忘れさせぬ。

それこそが芸術の役割なのではないか。

冬の気配が濃くなった頃、美代が私に告げた。

「まもなく、私はこの町を離れます」

私は驚き、言葉を失った。

「どこへ」

「まだ決めています。ただ、描きたいものを探しに」

その瞳には、決意の光が宿っていた。

私は胸の奥に突き上げるものを感じた。だが引き留める言葉を持たなかった。

美代は微笑み、写生帳を閉じた。

「芸術は、私にとって生きる証です。争いが消えぬなら、せめて影を描き残していきたい」

数日後、町に不穏な噂が広がった。遠い国で再び戦が起こったらしい。

人々の顔には怯えが走り、商店の軒先にはざわめきが満ちた。

私は古書店に赴き、老人に告げた。

「美代さんが町を去りました」

老人は静かにうなずいた。

「芸術家は旅をする。だが影は、残る」

その夜、私は川辺に立った。

水面には枯れ枝の影が揺れ、月光が淡く滲んでいた。私は両の手を見下ろした。

この手はかつて争いに加担し、人を傷つけた。だが、今はただ冷たい風を受け止めている。

赦しは与えられるものではない。求め、紡ぎ続ける営みそのものだ。

そして、その営みを、人は芸術と呼ぶのかもしれない。

川の流れが、静かに響いていた。

設問

問一

次の語句（本文傍線部）の意味として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選びなさい。

(1)「寂寥」

ア 賑やかで人が集まること

イ 静かで心細いさま

ウ 懐かしく温かな感覚

エ 怒りがこみ上げること

(2)「烈しい意志」

ア 強く激しく燃えるような決意

イ 衝動的で軽率な気持ち

ウ 他人に流されやすい心情

エ 心の迷いを隠す態度

(3)「赦し」

ア 罪を帳消しにして忘れること

イ 罪を負った者を理解し受け入れること

ウ 罰を逃れるための方便

エ 誤りを二度と繰り返さない誓い

問二

本文の内容として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選びなさい。

ア 主人公は芸術の無力を痛感し、それを完全に否定したが、島村との議論によって再び価値を見いだした。

イ 美代は光と影を共に描きながら、最終的に争いを忘却するための芸術に傾いていった。

ウ 島村は芸術の無力を嘆きつつも、描かずにはいられぬ衝動に駆られていたが、それを救いと信じ切ることはできなかった。

エ 古書店主は芸術を死者を蘇らせる力とみなし、そのゆえに争いを超えるものとして絶対視していた。

問三

美代の人物像として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選びなさい。

ア 光と影を等しく描きながらも、最終的には現実の厳しさに屈し、筆を折ることを選んだ。

イ 影の中に真実を見いだす一方、争いを変える力を芸術に託すことはしなかった。

ウ 孤独を抱えながらも、描くこと自体を生きる証とし、町を去る決意を固めた。

エ 芸術を絶対的な救いと信じ、戦や孤独を忘却させる手段として理想化した。

問四（記述…四十字以内）

島村が「芸術など、結局は何の役にも立たぬ」と言った背景にはどのような思いがあるか。

問五（記述…三十字以内）

主人公が「赦しは与えられるものではない。求め、紡ぎ続ける営みそのものだ」と考えたときの心境を説明せよ。

問六（自由記述…百四十字以内）

あなたがもし主人公の立場だったなら、この町での体験を通して「芸術」の意味をどう捉えるか。本文の内容をふまえて140字以内で自由に述べなさい。

解答・解説

問一（語彙）

(1) 正解…イ

解説…「寂寥（せきりょう）」は静かで心細いさま。主人公が旧家に戻ったときの孤独感を表している。

(2) 正解…ア

解説…「烈しい意志」は強く激しく燃えるような決意。美代が「影を描く理由」を語る場面での内面の力を示している。

(3) 正解…イ

解説…「赦し」は罪を負った者を理解し受け入れること。本文では「赦しは与えられるものではなく、自ら求め続ける営み」と捉えられている。

問二（内容把握）

正解…ウ

解説…

島村は芸術の無力を嘆き、「銃声に掻き消される」と絶望したが、それでも描かずにはいられない衝動を抱えていた。ただし、それを「救い」とまで信じ切ることにはできず、矛盾の中に揺れていた。

- ・ ア…主人公が芸術を「完全否定」してから「再評価」する展開はない。
- ・ イ…美代は「忘却」ではなく「影を描き残して記憶する」立場。
- ・ エ…古書店主は「死者を蘇らせる」とは言わず、「忘れぬための手立て」として芸術を語った。

問三（人物像理解）

正解…ウ

解説…

美代は孤独を抱えつつも、「影にこそ真実を見いだす」と語り、描くことを生きる証として町を去る決意を固めた。

- ・ ア…筆を折る描写はなく、むしろ描き続ける意志を持っている。
- ・ イ…一部正しいが「争いを変える力を託さなかった」という限定は本文で断定されていない。
- ・ エ…芸術を「絶対的な救い」とはせず、現実を直視する態度を貫いている。

問四（記述：40字以内）

模範解答例…

戦乱で芸術が踏みにじられ、人を救えぬ無力さに直面し、絶望を抱いていたから。

（37字）

別解例…

- ・ 芸術が戦争の暴力に掻き消され、役立たぬと痛感したから。
- ・ 飢えや死を前に、美を顧みる余地はないと感じたから。
- ・ 描き続けても現実を変えられぬ無力を悟ったから。

自己採点チェック

- ・ 島村が「芸術の無力」を感じた理由を明確に書けているか
- ・ 「戦争」「絶望」といった要素が盛り込まれているか
- ・ 35字程度で自然にまとまっているか

問五（記述：30字以内）

模範解答例…

罪を消せずとも、人と関わり希望を紡ぎ続ける決意を抱いたから。（30字）

別解例…

- ・ 赦しは与えられるものでなく、自ら築く営みと悟ったから。
- ・ 過去を背負いつつも、未来を変えようとしたから。

- 完全な救いはなくても、求め続ける意味を見いだしたから。

自己採点チェック

- 「赦しⅡ与えられるものではない」という核心があるか
- 主人公の内面的な変化や希望が表現されているか
- 30字以内に収められているか

問六（自由記述：140字以内）

模範解答例

芸術は現実を直接変える力を持たないかもしれない。しかし美代の影の絵や古書店主の言葉が示したように、芸術は人の心に残り、争いを忘れぬ灯となる。私は芸術を、生き残った者が過去と向き合い、未来に歩みをつなぐ支えと捉える。役立つか否かを超えて、生きる証そのものだと感じる。(132字)

別解要素例

- 芸術は現実を変えられないが、人の記憶をつなぐ力がある。
- 戦の傷を癒せないが、忘れぬための形を残す営みだと感じた。
- 芸術は救いではなく、絶望の中でなお生きる理由を与える。

自己採点チェック

- 本文の要素（美代・島村・古書店主）と結びついているか
- 芸術の意味を自分の言葉で表現できているか
- 140字以内で論理と情緒のバランスが取れているか

【第五問】 廃坑の声

秋の終わり、私は北方の山あいに位置する寂れた町へ向かった。大学の恩師から依頼を受け、旧鉱山の地質調査を任されたのである。学術的にはすでに注目されなくなつた地帯であつたが、近年、地滑りの危険があるとの噂が立ち、再調査が必要とされたのだ。

朝まだきの列車を降り立つと、眼前に広がるのは小駅の侘びしさであつた。木製の改札口は煤で黒ずみ、風にきしむ柱の音が、かえって無人の寂寥を強調している。かつて鉱山が栄えた頃には、ここを出入りする人々の喧噪で賑わつたに違いない。しかし今や、構内に響くのは靴音と風音ばかりであつた。

バスは一日に二本しか出ていないという。私は重い測定器具の入つた鞆を肩にかけ、やがて到着した古びたバスに身を沈めた。窓の外には、刈り取りの済んだ田畑と、紅葉の葉を半ば散らした山の稜線が続く。車内には私を含めてわずか三人。年離れた婦人と、煤けた作業着の男、それに私だけであつた。

やがてバスは終点に到着した。そこは「白嶺（しらね）」と呼ばれる小さな集落で、両脇に並ぶ家々はどれも屋根の瓦が剥がれ、雨樋は外れかけている。道端に腰かけた子供が一人、物珍しそうにこちらを見ていた。人影の少なさと静寂に、私は一瞬、時間が止まったような錯覚を覚えた。

宿を探して道を歩いていると、声をかけられた。振り向くと、背を丸めた老人が立っていた。顔には深い皺が刻まれ、煤に染まつたように黒ずんでいる。

「先生さんかね。地質を見に来られたとか」

私は驚きつつも頷いた。老人は薄く笑い、杖を突きながら近寄ってきた。

「わしはこの山の坑夫をしておつた。もう半世紀も前のことだが……まだ声が残つとる」

「声？」 私は聞き返した。

「山の声じゃ。坑道に入れば、必ず耳に届く」

私は苦笑を浮かべた。

「風の音のことでしょう。閉所で反響すれば、人の声のようにも聞こえる」

老人は静かに首を振った。

「いや、あれは風じゃない。あれは……人を呼ぶ声じゃ。わしの仲間も、それに導かれるように消えていった」

私は返す言葉を失った。科学者としての理性は即座に否定を告げたが、老人の眼差しには冗談を弄ぶ余地がなかった。

その晩、宿の帳場で聞けば、この老人は「佐吉」と呼ばれ、長らく坑道に従事していたという。戦時中には若者を指揮して掘削を続け、戦後も町に留まった。仲間の多くは事故で命を落とし、いまや独り身であるらしい。

部屋に戻っても、佐吉の「声」という言葉が頭から離れなかった。

私は窓を開け、夜の山を眺めた。冷たい風が頬を撫で、闇の底から何かが囁くように思えた。

——馬鹿げている、と自らを戒めた。しかし、その囁きは確かに、胸の奥にざわめきを残した。

翌朝、冷え込みはさらに厳しさを増していた。空は澄み渡っているのに、吐く息は白く、足元の霜は踏みしめるたびに細かな音を立てた。私は鞆に測定器具を詰め、地図を携えて廃坑へ向かった。

集落を抜ける道は急な坂で、両脇にはすでに朽ちた作業小屋が立ち並んでいた。窓ガラスは碎け、壁には草木が這い上がり、内部にはかつての人々の営みの痕跡だけが残されている。そこを通るたび、私はこの山が過去に抱えてきた熱と悲鳴を想像せずにはいられなかった。

坑道の入口に立つと、冷気が頬を刺した。鉄製の柵は錆びついており、施錠は形だけに近かった。私は錠を外し、足を踏み入れた。暗闇が、まるで生き物のようにこちらを呑み込もうと迫ってきた。ランプに火を入れると、黄色い光が湿った壁をかすかに照らした。

坑道の壁には、古い掘削の痕が残っている。岩肌には鉱物がわずかに煌めき、ところどころに水滴が垂れていた。その一つひとつを観察し、記録帳に線を引き、測定器で数値を確認する。私は科学者としての習性に従い、ひとつずつ淡々と作業を進めていった。

しかし、奥に進むごとに空気は重く、湿り気は増した。ランプの炎が小さく揺れ、その影が壁に奇妙な模様を描いた。

——そのときである。

耳の奥に、かすかな囁きが忍び込んできた。

私は立ち止まった。ランプの灯を高く掲げ、耳を澄ます。確かに声がある。低く、途切れ途切れの響きが、岩の奥から漏れてくる。

「誰かいるのか」

声を上げた。しかし応えはない。ただ、囁きは波のように寄せては返し、やがて消えた。

私は胸の鼓動を押さえるように手を当て、理性を総動員した。

「風の反響だ。坑道が複雑に入り組んでいるから、音が人の声に似て聞こえるのだ」
そう呟いてみた。だが、その声は自分に言い聞かせているだけに思えた。

さらに奥へ進むと、今度は光が視界をかすめた。

壁の裂け目から、一瞬、銀色の光が流れたのだ。私は驚いて立ち尽くした。鉱物の反射だろうか。ランプを近づけたが、そこにはただ黒ずんだ岩があるだけだった。汗が背を伝った。冷たいはずの坑内で、額に熱い滴が浮かぶ。

「錯覚だ……」

声に出したが、口の中は乾ききっていた。

やがて広い空間に出た。そこには古びた木の梁が残り、中央には壊れかけた作業机があった。机の上には錆びた道具が散乱している。人の気配は長らく途絶えているはずだ。それでも私は、そこに誰かが腰を掛け、作業を続けている幻を見た。

——囁きが再び響いた。今度はより近く。耳許で誰かが呼んでいるようだ。

私は反射的に振り返った。しかし、そこには誰もいない。

足が震え、ランプの光が揺れる。壁に映る自分の影が、別人のように歪んで見えた。

科学者として、私はこの体験を記録しなければならなかった。だが、筆は震えてまともに動かなかつた。理性と恐怖がせめぎ合い、心は裂かれそうだった。

外に出たとき、日はすでに傾きかけていた。山の空気が冷たく肺に刺さる。私はしばらく立ち尽くし、振り返ることもできなかつた。

坑道は黙して口を閉ざしていた。だが、確かに――あの声は、私の耳に刻まれていた。

翌日の夕刻、私は宿の囲炉裏端で佐吉と再び向かい合った。炭火の赤がゆらめき、煤けた梁が低く垂れ込めている。外では木枯らしが吹き、戸板を叩いていた。

「声を聞いたらう」

佐吉は、私が盃を手取るより先にそう言った。

私は返答をためらった。否定するべきか、認めるべきか。

「……風の音だろう。錯覚にすぎない」

そう言いながらも、声が震えていた。

佐吉は薄く笑い、盃を口に運んだ。

「わしらも、初めはそう思った。だが、あれをただの風と片づけることはできん」

囲炉裏の火がぱちりと弾けた。

佐吉は灰色の瞳を細め、低く語り始めた。

「戦の頃、この山は人手を求められた。わしも若い衆を連れて掘り続けた。暗闇の中、食うものもろくにない。ある夜、仲間の一人が突然消えたんじゃ。灯を持って先を行っていたのに、ふと気づけば影も声もない。ただ、遠くで呼ぶような囁きが聞こえた」

私は息を呑んだ。

「探したが見つからなかつたのですか」

「何日も探した。坑道は迷路のようで、どれだけ呼んでも応えはなかった」

佐吉の声は淡々としていたが、その奥には拭いきれぬ痛みがあった。

「それ以来、わしは声を聞かたび、あの仲間の顔を思い出す。科学が何と説明しよう、あの声は確かにそこにある」

私は唇を噛んだ。

「……それでも、私は科学を信じる。人は理を積み重ねてきたからこそ、ここまで来たのだ」

「科学がすべてを語れると思うか」

佐吉の目は鋭かった。

「争いも病も、なぜ人を奪うかを科学は説明できても、奪われた者を返すことはできません。わしらが求めているのは答えや理屈ではなく、失われた者がまだ傍らにあると信じたい心なんじゃ」

私は言葉を失った。

頭では「それは幻影だ」と叫んでいた。だが、胸の奥ではその思いが重く響いていた。

「先生」佐吉は囁くように言った。

「科学を疑えと言っておるのではない。疑いの外に広がるものも、人は畏れと呼ぶのだ」

沈黙が流れた。囲炉裏の火が揺れ、影が壁を這った。その影は、坑道で見た歪んだ自分の影と重なった。

その夜、寝台に横たわっても眠れなかった。佐吉の言葉が繰り返し胸に甦った。

——答えや理屈ではなく、信じたい心。

窓の外の闇は深く、風の音が耳に忍び込む。私は思わず耳を塞いだ。だが、心の奥では、確かに誰かの囁きを聴いていた。

夜明け前、私は再び廃坑へ向かった。

空はまだ群青色に沈み、山の稜線は薄い霧に包まれていた。息を吐けば白く凍り、

手に握るランプは頼りなく揺れている。眠れぬまま夜を過ごした私は、佐吉の言葉を胸に刻みながら、最後の確かめをしようと決めていた。

入口の柵を開け、闇の中へ足を踏み入れる。湿った空気が押し寄せ、背筋を冷やした。坑道の奥へ進むにつれ、耳の奥で微かな響きが高まっていく。最初は風かと思った。だが、それは言葉のかけらのようであり、祈りにも似た低い囁きだった。

「――来い」

はつきりと、そう聞こえた。

心臓が一気に高鳴った。ランプを掲げ、声の方へ進む。岩壁には水滴が流れ、光が銀色に反射した。私は岩肌の手を当てた。冷たさが骨にまで沁み込む。

さらに奥へ進むと、空洞が広がっていた。古びた梁が朽ちかけ、床には錆びた道具が散乱している。その中央で、白い光が淡く揺れていた。私は息を呑んだ。光は人影のように形を変え、やがて霧のように消えた。

「……誰だ」

声をかけたが、返事はない。ただ、耳許で囁く声が確かにした。

「ここにいる」

私は震える手で記録帳を取り出した。だが筆先は震えて紙を汚すだけだった。理性は「錯覚」と叫んでいる。光の屈折、空気の振動、疲労による幻覚――。

だが、胸の奥では別の声が囁いていた。

――これは幻ではない。

そのとき、不意に視界が揺れた。影が壁を走り、複数の囁きが重なり合った。男の声、女の声、子どもの声。彼らは名を持たぬまま、ただ存在を告げようとしていた。

私は耳を塞いだ。だが、声は内側から響き続けた。

「わしらはここにおる」

「忘れるな」

「見届けてくれ」

涙が頬を伝った。科学者である私の矜持は、その声を幻覚と断じようとした。しかし、それを幻と切り捨てた瞬間、彼らが永遠に失われると直感した。

「……私は、忘れない」

声に出していた。

囁きは静かに遠ざかり、光も霧のように消えた。残ったのは闇と、自分の荒い息だけだった。

坑道を出たとき、東の空は薄く明るんでいた。山の稜線が金色に染まり、鳥の聲が響いた。冷たい風が頬を撫で、私は深く息を吸い込んだ。

佐吉が入口に立っていた。

「……見たな」

私は頷いた。言葉はなかった。

老人は微笑み、遠い空を見上げた。

「科学で解けぬものを、恐れるな。それを畏れる心もまた、人を人にする」

私はその言葉を胸に刻んだ。科学を手放すことはない。だが、その外に広がる不可知を畏れる心を、否定することもできない。

山は確かに声を持っていた。それが鉱石の反響であれ、人の幻聴であれ、あるいは失われた命の記憶であれ――。

答えはわからない。だが、私はもう、この声を忘れることはないだろう。

夜明けの光が、山と私を静かに包んでいた。

設問

問一

本文中の語の意味として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選べ。

(一)「煤けた」

ア 光沢があり、鮮やかな色をしていること

イ 煙や年月で黒ずんで薄汚れたようす

ウ 古く堅苦しく、格式ばったようす

エ 湿気で冷たく、重苦しいようす

(二)「錯覚」

ア 事実と異なる知覚を本当のものと感じること

イ 不安や恐怖によって物事を誤って解釈すること

ウ 見たいものを意図的に作り出すこと

エ 過去の出来事を無意識に美化すること

(三)「畏れる」

ア 身近な危険に警戒すること

イ 不可知のものに敬意と恐怖を抱くこと

ウ 心から敬愛し慕うこと

エ 相手を軽んじて恐れないこと

問二

本文の内容として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選べ。

ア 主人公は坑道で囁き声や光を確かに感知したが、それらを終始「風や光の反射にすぎない」と断定し、佐吉の語る体験を一切認めなかった。最終的には科学による合理的説明を唯一の真実とみなし、心を揺さぶられることはなかった。

イ 佐吉はかつて仲間を失った体験を語り、その記憶を「声」として今も感じていると述べた。それは迷信を広めるためではなく、科学で説明できぬ出来事にも耳を

傾けるべきだという姿勢を示すものであり、主人公は表向き反発しつつも内心では揺さぶられ続けた。

ウ 主人公は坑道で得た不可解な体験を記録しようとしたが筆が震えて書けず、科学的説明に固執する態度の限界を悟った。そして佐吉の語りと自身の体験を重ね、科学だけでは語りきれない畏れを抱くことが人間の営みに必要だと気づいた。

エ 主人公は坑道での囁き声を自らの罪悪感や疲労による幻覚と即座に断定し、外に出ても判断を覆さなかった。佐吉の語りを危険な幻想として拒絶し、科学こそが唯一の真実であると確信するに至った。

問三

佐吉の人物像について最も適切なものを、ア～エの中から一つ選べ。

ア 若き日に仲間を失った体験を迷信として切り捨て、以後は科学を唯一の基準として過去を合理的に説明し続け、主人公には迷信を利用して不安を煽る態度を取った。

イ 坑道で仲間を失った痛ましい経験を抱えつつ、科学の解明を否定するのではなく、その限界を認め、不可知を畏れる心を大切にすべきだと主人公に静かに語った。

ウ 科学に無関心で、山の声を神秘的存在として絶対視し、そこに全ての意味を見いだそうとすることで喪失感を埋め、主人公の理性的立場を否定した。

エ 芸術家のように美を追い求め、坑道の声を象徴的表現として楽しみながら過去を克服し、科学的視点にも積極的に共感を寄せる調和的な人物であった。

問四

本文中で描かれる複数の囁き声の表現が象徴しているものとして最も適切なものを、ア～エの中から一つ選べ。

ア 坑道の複雑な構造により複数方向から風音が反響し、人の声のように錯覚された自然現象であり、それ以上の意味はない。

イ 過去に坑道で命を落とした者たちの声を実際に聞こえたと思われ、科学では説明しきれぬ不可知の存在を求め、失われた命を今も傍らに感じたいという人の願望を映し出している。

ウ 主人公が疲労や恐怖から幻聴を経験したにすぎず、実際には音も光も存在せず、神秘と解釈するのは本文の趣旨に反する。

エ 坑道の鉱石に含まれる特殊な結晶が光を反射し、共鳴音を生んだため、視覚と聴覚が錯覚を起こした科学的現象を暗示する役割を担っている。

問五

本文全体の展開について最も適切なものを、ア～エの中から一つ選べ。

ア 主人公は科学的立場に固執しつつ坑道の不可解な体験に直面し、佐吉の語りと自身の経験を通して、科学が解明できぬ領域を畏れる心も人間に必要なだと気づくに至る。

イ 主人公は坑道の体験を合理的に説明し、科学のみを絶対視する立場を終始崩さず、佐吉の語りを迷信と断定し退け、心を揺さぶられることはなかった。

ウ 佐吉の体験談を全面的に受け入れた主人公は科学への信頼を完全に失い、坑道での声を霊的存在と信じ込み、その後の人生を神秘の探究に費やすと決意する。

エ 主人公は坑道での体験を契機に科学を疑い、最終的には科学が誤りであると確信し、神秘を唯一の真実とみなす立場に移行した。

問六

本文の主題として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選べ。

ア 科学的合理性に基づく説明が人に安心を与える唯一の道であり、神秘を信じる心は人を惑わす危険なものにすぎない。

イ 科学的探究と神秘的な畏れを対立させるのではなく、科学を基盤としながらも不可知を畏れる心を持ち続けることが、人間の営みを豊かにする。

ウ 過去の記憶や幻影に囚われ続けることこそが人間の生の証であり、科学はその営みを妨げる。

エ 神秘を信じる心を強めることで科学を否定し、過去の幻影に慰めを求め続けることが最も人間らしい生き方である。

解答・解説

問一（語彙）

(1) 正解…イ

解説…「煤けた」は煙や年月によって黒ずみ、薄汚れたようすを表す。本文では佐吉や宿の描写に用いられ、時の重さと衰退の印象を強調している。

(2) 正解…ア

解説…「錯覚」は、事実と異なる知覚を本当のものと感じること。本文の主人公が坑道で囁きを聞いた際、自分にそう言い聞かせた場面に対応する。

(3) 正解…イ

解説…「畏れる」は不可知のものに敬意と恐怖を抱くこと。本文終盤で主人公が「科学で解けぬものを畏れる心を否定できない」と述べた心境を表している。

問二（内容把握）

正解…ウ

解説…

主人公は坑道で囁き声や光を体験し、科学的説明を試みたが限界を悟った。佐吉の語りと自身の体験を重ね、科学だけでは語り尽くせない「畏れ」の必要性を感じ取った。

- ・ ア…一貫して科学的合理性に固執したのではなく、最後に心が揺れ動いているため不適。
- ・ イ…佐吉の姿勢の説明は正しいが、主人公の態度を「内心揺さぶられた」に留めると不十分。本文では「限界を感じ、畏れを抱いた」ことが重要。
- ・ エ…幻覚と断定して確信を固めたのではなく、葛藤を経て畏れを認めたので誤り。

問三（人物像）

正解…イ

解説…

佐吉は科学を否定するのではなく、その限界を認めたくえて「不可知を畏れる心」を語った人物。仲間を失った体験がその背景にある。

- ア…迷信を利用して不安を煽る描写はなく、むしろ静かに語っている。
- ウ…神秘を絶対視して理性を否定したのではない。科学の必要性も否定して
いない。
- エ…芸術的に楽しむ調和的態度は本文に描かれていない。

問四（表現理解）

正解…イ

解説…

複数の囁き声は、過去に坑道で命を落とした者たちの存在や、人が失われた命を今も傍らに感じたいという願望を象徴する表現。主人公の内面に畏れと共鳴を生じさせた。

- ア…自然現象として片づけるのは本文の趣旨に反する。
- ウ…単なる幻聴と断定するには描写が豊かすぎる。
- エ…鉱石の科学的効果を暗示する記述は本文にはない。

問五（論理関係）

正解…ア

解説…

本文は、主人公が科学的説明を試みながらも、坑道での体験と佐吉の語りによって、科学だけでは解けない領域を畏れる心の必要性に気づく展開を描く。

- イ…主人公は終始揺れなかったのではなく、葛藤と変化がある。
- ウ…科学を完全に失い神秘に没入した描写はない。

- ・ エ…神秘を唯一の真実とみなすこともしていない。

問六（主題把握）

正解…イ

解説…

主題は、科学を基盤としつつ、不可知を畏れる心を忘れないことの大切さ。科学と神秘を対立ではなく補完関係として捉える視点を提示している。

- ・ ア…神秘を全否定する立場では本文に反する。
- ・ ウ…科学を不要とする立場は本文にない。
- ・ エ…神秘を唯一の真実とするのも本文の趣旨に反する。

【第六問】贋作の真実

美術館の地下収蔵庫は、外の昼光と切り離された時間の底のように静かだった。湿度計の赤い針は55%を指し、温度は21度で安定している。結城涼は記録用のタブレットに数値を書き込み、ラックから薄いグレーの保存箱を引き出した。箱の蓋には鉛筆で「不-27」と書かれている。特別展〈回顧・霧島蒼〉に合わせ、地方の旧家から貸与が決まった一点だ。

蓋を開くと、薄い不織布とシリコーンの薄紙が現れ、さらにそれを外すと、暗い群青の平面が目を開いた。キャンヴァスはF10号ほど、画題は「夜の踊り子」。画家・霧島蒼が最晩年に用いたと記録される冷たい青——美術史家たちはそれを「霧島ブルー」と呼んだ——が、舞台の背景のように塗り込められ、その手前で白いドレスの女が半身だけこちらを振り向いている。

涼はまず目視で縁を追った。鋏の間隔、木枠（ストレッチャー）の角に挟まれた楔（キー）の状態、側面に付着した古いワニスの黄変。次に斑のない斜光を作るため、斜め上からレーキングライト（擦過光）を当てる。表面に微細なクレースが走り、厚塗り（インペスト）の峰が波のように浮き上がった。——そこで、違和感が生まれた。

インペストの峰の角度が、霧島のほかの作品で見慣れた“躊躇いの跡”を持っていない。通常の霧島の筆は、盛り上げては刃のように削ぎ、また盛る。だがこの画面は、厚みにためらいがない。盛り上げたら、そのまま押し返していない。

「涼、上がるよ」学芸員の早瀬が顔をのぞかせた。

「……ちょっと待って。UVも、撮る」

紫外線（UV）を当てると、表面のワニスが乳白に浮き、リタッチの箇所が暗いパッチとして沈んだ。驚いたのは、白いドレスの胸元に三角形の補彩があることだった。過去に落絵具を埋めるため膠系のメデイウムで地を立て、その上から古いピグメントで色を合わせているらしい。記録写真を数枚。さらに赤外反射撮影（IRR）も

準備する。

IRRのモニターに、薄く走る線が現れた。アンダードローイング——下描きだ。炭素性の線が、ドレスの折り返しを何度も引き直している。その引き直しの濃淡に、涼は覚えのある癖を見つけた。霧島の初期素描に残る、あの短い逡巡の連なり。

「不思議だな」涼は独り言を漏らした。「表面の筆は別の手のようで、骨格の線は本人に近い」

休憩室で淹れた薄いコーヒーの湯気が、蛍光灯の白さの中で揺れた。早瀬が椅子に腰掛け、展覧会のリストをめくる。

「そのK-27だけ、来歴が曖昧なのよ。旧家の蔵から出たけれど、取得の記録が戦前の火事で失われたそうだった」

「額縁の裏、ラベルは？」

「破れて読めなかった。でも貸与契約書、館長が喜んでサインした。『未見の霧島が出る』って」

涼はコーヒーを置いた。「小さい断面、採っていい？」

早瀬は少し考える。「展示に間に合うなら。——館長には言っておね」

断面サンプリングは最小限でなければならぬ。背面のキャンヴァス耳から微粉を採り、樹脂に包埋して研磨、顕微鏡下で層構造を見る。涼は顕微鏡のピントを合わせ、目を凝らした。支持体（キャンヴァス）の上に灰白の地塗り（グラウンド）、その上に薄い青、さらにワニス層、そして比較的新しい薄い黄色——再ワニス——が乗る。層間の境目は清潔で、古い作品にありがちな汚染層の滲み込みが少ない。つまり、最表層の処置は近年に施された可能性が高い。

「誰かが触っている。しかも手際が良すぎる」涼は呟いた。「再ワニスの薄さ、古い層に合わせた溶解度カーブ……修復家の仕事だ」

夜、涼は自宅の本棚から霧島蒼の図録を何冊も引っ張り出した。ページの端に黄色い付箋が増える。ある論文の注に、奇妙な一節があった——「一時期、霧島は偽名で商業画を描き、生活費を得たという風説がある」。

翌朝、館長室で涼は話を切り出した。

「K-27、表面の筆致に違和感があります。IRRでは霧島の癖が見えますが、表層は別の手、あるいは別の時期の塗り直しの可能性が高い。更に、再ワニスと補彩が非常に巧妙で……」

館長は手を振った。「展示まで三週間。『未見の霧島』は目玉だ。鑑賞者は筆致の細部より、全体の構図や色で霧島を判断する。リスクのある疑義を出すのは避けたら」

「真贋は展示の信頼に関わりません」

「だからこそ、疑義は学芸課ではなく対外広報の問題になる。——涼君、修復士としては、状態を安定させれば良い」

退室後、涼は壁にもたれた。長い廊下の先、ガラス越しに展示室の白が見える。そこに掲げられる絵の前で人々が立ち止まり、各々の記憶を編む。もし、そこに置かれるものが「真作」でも「贋作」でもない、何か曖昧な境界線上のものなら——。

午後、収蔵庫で涼は再び作品と向き合った。溶剤テストを行う。綿棒にごく薄い混合溶媒を含ませ、目立たない端で転がす。古いワニスが少しだけ溶けて飴色に滲む。次にゲルクリーニングの準備。絵肌に負担をかけないように、イオンコントロールしたゲルを用いて表層の汚れだけを穏やかに浮かせる。

綿棒が画面の隅を撫でたとき、涼はふっと息を止めた。線があった。薄い、ほとんど見えない鉛筆線——誰かが後から描き足したガイドの痕。霧島の下描きの上に、別の手が薄く「なぞって」いる。

涼は写真を撮り、拡大した。ドレスの折り返し。霧島はそこで線を解く。だがこの鉛筆は線を縛り直す。「ここまで」と区切るための線だ。

夜、早瀬からメッセージが来た。「霧島の旧居、郊外に残ってる。管理人さんに頼めば、資料室見せてもらえるかも」

涼は車を出した。小雨が降り始め、ガラスに水の筋ができる。郊外の霧島記念館は、かつてのアトリエを改装した小さな建物だった。対応したのは白髪の男性で、

管理台帳に「結城」と書き込む。

資料室は狭く、引き出し式の平置きケースが並んでいた。涼は手袋をはめ、薄紙をめくる。素描、メモ、絵具の買い物リスト。そこに、一冊の小型ノートが挟まれていた。

鉛筆の走り書き。「名前を変える。これで、誰にも気づかれない」「空腹に勝つために、美を少しだけ売る」「だが、売るものは私ではない。私の影だ」。

涼は立ち尽くした。ページをめくると、覚えのある線が現れた。あのドレスの折り返し。だが、ページの端には別の文字が――「川名」。小さく、遠慮がちに。

受付に戻ると、管理人が言った。「川名さんね。若い頃、ここで霧島先生に習っていた。……もうだいぶ前に亡くなられたがね。修復も上手で、先生の古い絵の掃除や裏打ちをよく手伝っていたよ」

「裏打ち？」

「支持体の弱った絵の裏に、薄い布を当てるとき。あの人は日本画も少しやっていたから、和紙の扱いも上手でね」

霧島は“影”を売るために名前を変えた。川名は、霧島の絵を手伝い、時に手を入れた。二つの線が、涼の頭の中で交わる。

翌日、収蔵庫で涼は背面をもう一度見た。キャンヴァスの縁に、薄い糊の跡が走っている。古い裏打ち布が剥がされた痕。剥がしたのは、誰か――巧みな手。川名？あるいは、さらに別の修復家？

「どうするの？」早瀬が小声で訊いた。

「リタッチの境界をUVで抽出して、コンディション報告にきちんと記す。それから……」

「それから？」

「贋作とは言わない。でも、『異質性の存在』は書く。下層に霧島がいて、上層に別の時間の誰かがいる。どちらかが偽物だとは限らない。作品が生き延びるために重なった層だ」

数日後、学内の審議会で、展示の是非が話し合われた。館長は強気だった。「来歴の断絶は戦火と火事のせい。修復は歴史の一部。『異質性』はむしろ作品の魅力として提示できる」

一方で年長の研究者が言った。「観客は『霧島の新作』として見る。異質性の説明は、読み飛ばされる。――やめておけ」

沈黙が落ちる。涼は手を挙げた。「私は、展示に賛成です。ただし、キャプションに“層”の説明を明記してほしい。赤外反射の下描き写真も掲示し、絵がどのよう
に時間を重ねてきたかを可視化したい。観客に判断を委ねるために、材料と過程を
開くべきです」

会議後、廊下で館長が言った。「結城君、君は正直だ。それは時に恐ろしい。観客は単純な物語を好む。だが、今回は君のやり方でいこう」

早瀬が笑った。「ね、言ったでしょ。涼の“真面目さ”が売りになる時があるって」
特別展の初日、朝の光がガラス天井から柔らかく降りていた。壁の白に、群青が
静かに浮かぶ。K-27の前に、人がゆっくり集まる。キャプションには、材料・技法・
修復歴、赤外反射の画像と簡単な解説が添えられている。

一人の老婦人が、ドレスの折り返しを指で辿るように見つめた。やがて小さく頷
き、呟く。「この“ためらい”、懐かしいわ」
隣にいた若い男性が首を傾げる。「ためらい？」

老婦人は微笑んだ。「線は、進む時より止まる時に、手の正体が出るのよ」

午後、展示室の隅で涼は、誰かの視線を感じて顔を上げた。背の高い男が、K-27
の前にじっと立っている。頬に薄い傷、手には古いカメラ。男は涼に近づき、名乗
った。「川名慎一。……たぶん、あなたがこの絵を“ここ”に連れてきた人だ」

涼の喉が鳴った。「川名……?」

「祖父が、霧島の助手をしていた。俺は写真の道に進んだけど、祖父が最後に言っ
た。『おれの“線”は、あれで良かったのだろうか』って」

二人は空いた講義室に移動した。慎一は古い封筒を出す。中には、修復の記録ら

しきメモの断片。和紙に鉛筆で「先生の線、残す」「地のクラック固着、膠薄く」「ドレス、境界だけ誘導」。

慎一が言った。「祖父は、先生の絵の“生”を延ばすために、時に細い誘導線を足した。先生の線を消さないように、押し戻さないように、ただ“ここまで”と囁く程度に。……それは贋作か？」

涼は答えなかった。

「祖父は贋作者じゃない」慎一は続けた。「でも、祖父の線は、先生の絵に“いる”。——あなたはどうか書いた？」

「キャプションに、『下層の下描きは霧島の手に近似。しかし表層に後年の操作の痕跡。修復／補彩の関与が高い』と」

慎一は目を閉じ、長く息を吐いた。「ありがとう」

展示が進むにつれ、~~NOT~~の前で足を止める人は増えた。学芸員のトークでは、涼が材料と層構造の図を示し、「真贋」という単語を使わずに「時間」の話をした。

「この絵は、ひとりの画家の手だけで完結していません。素材の老いを延ばす修復の手、戦争や市場や家族の事情——多くの手と時間が重なって、今日ここに立っています。『本物』と『偽物』の二分法ではこぼれ落ちる現実を、層として見てくださ
い」

講堂の後方で館長が腕を組み、微笑んだ。早瀬は頷いた。慎一は、静かにカメラのシャッターを切った。

閉館後、涼は再び群青の前に立った。夜の美術館は、ほとんど無音だ。警備の巡回灯が遠くで瞬き、空調の低い響きが床を這う。絵の前に立つと、涼は耳を澄ませた。誰のものでもない囁き——絵具と膠と布が、互いの境界を確かめ合う微かな音。

「君は、どこまでが君で、どこからが誰かだろうね」涼は小さく言った。「けれど、層が嘘だとは思わないよ」

帰り際、涼は収蔵庫に寄った。暗い棚の奥に、かつて自分が修復した別の絵が眠っている。地の割れ目を膠で固着し、剥落を止めたあの作業の感触が蘇る。あれは、

作者の線に寄り添うための、ぎりぎりの介入だった。

階段を上がると、ガラス越しに夜の街が広がる。無数の光が、それぞれの層を重ねている。涼の耳には、群青の絵がまだ微かに鳴っていた。

翌週、新聞に短い評が載った。(未見の霧島、層としての真実)。記事の末尾には、こうあった――「真贋の二項対立を超え、作品が生き延びるために重ねられてきた“手”を可視化する試み。作品は孤独に完結しない。見つめる者の眼差しすら、その最後の薄い層である」。

涼は記事を切り抜き、保存箱に挟んだ。箱には鉛筆で「K-27」とある。その文字の上に、涼は小さく別の文字を記した。「層」。

夜、ふと目が覚めた。枕元のノートに、涼はひとことだけ書いた。「線は、止まるところに正体が出る」。そしてペンを置いた。――あの群青の前で立ち止まる誰かの姿が、脳裏に浮かぶ。見知らぬ誰かの呼吸が、その絵にまた薄い層を重ねる。

翌朝、美術館の扉が開く。靴音が展示室へ吸い込まれ、また新しい日が絵の前を通り過ぎていく。涼は手袋をはめ、ライトを整え、ワニスの曇りがないか、微細なひびが増えていないか、点検を始めた。試験管に残った溶媒がわずかに揺れ、瓶中の綿が静かに光る。

「おはよう」早瀬が言う。

「おはよう」涼は応じる。「今日も、層を見せよう」

群青は、変わらぬようで、わずかに変わっていた。空調の湿度が一つ上がり、微かな光が角度を変える。絵は、見られ、語られ、守られ、わずかに老い、また別の層を得る。その全てが、ここに在ることの証であるかのように。

涼は最後にもう一度だけ、ドレスの折り返しを見つめた。霧島の逡巡と、川名の誘導と、名も知らぬ修復の手と、今日この瞬間の自分の眼。その交差点に、ごく小さな、しかし確かな“生”が灯るのを見た。

設問

問一

本文中の語（傍線部）の意味として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選べ。

(一)「クレーズ」

ア 絵画の表面やワニス層にできる微細なひび割れを指し、経年や乾燥収縮などによって生じる。美術品の保存状態を判断する重要な手がかりとなるが、本文ではその存在が作品の真贋判断の決定的証拠とされている。

イ 顔料と油の混ざり具合が不均一になって生じる色むらを指し、作者の意図によるものと経年劣化によるものがある。本文では「クレーズ」の筆致と関連して言及され、霧島の作風に特徴的な現象として描かれている。

ウ 絵の具の層が支持体から剥がれ落ちる現象を指すが、本文ではワニス層の下で進行している構造的劣化の呼称として用いられ、肉眼では確認が難しいと説明されている。

エ 厚塗り（インペスト）によってできた隆起部分が物理的衝撃で崩れ、表面に微細な段差や凹凸が生じる現象。本文では舞台背景の群青部分にのみ見られる特殊な状態として描かれている。

(二)「支持体」

ア 絵画の表面を保護するために施される透明な層で、ワニスや樹脂などが該当する。本文では、「支持体」の再ワニス処理に関してこの語が使われている。

イ 絵画の画面を構成するために塗られる下地や地塗りのこと。本文では地塗りの色合いや質感から制作年代を推測する場面で登場している。

ウ 絵具をのせる基盤となる素材で、キャンヴァス・板・紙などが含まれる。本文ではキャンヴァス耳から微粉を採取する描写で言及され、構造分析の出発点となっている。

エ 作品の重心を安定させるため額縁の裏に取り付けられる補強材のこと。本文では額縁裏のラベルや構造を確認する場面でこの語が使われている。

(3) 「リタッチ」

ア 欠損部分や剥落した箇所を周囲と調和させるように補彩する修復作業で、オリジナル部分を侵さずに行うのが原則。本文ではドレス胸元の三角形の補彩として具体的に描かれている。

イ 作品全体の色味や構図を大幅に変更するための塗り直しで、本文では霧島が初期作品を全面的に改作した過程を指す。

ウ 展示前の作品を美しく見せるため、一時的に色を鮮やかにする化粧直し。本文では館長の指示で行われた処置として描かれている。

エ 赤外反射撮影で下描きを鮮明にするための技術的加工。本文ではアンダードローイングの線を強調する目的で用いられている。

問二

本文の内容として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選べ。

ア 涼はK-27の表層と下層の筆致の不一致に気づき、科学的調査によって下描きが霧島のものである可能性を見出したが、館長は展示を優先し、真贋の疑義を伏せたまま会期に臨んだ。涼はこれに反対したものの、慎一との出会いで作品に加えられた介入の意義を理解し、結果的に展示を容認した。

イ 涼は赤外反射や断面観察などの科学的手法で、K-27が霧島の下描きに基づきつつも後年の修復や補彩を受けていることを突き止めた。館長や学芸員との議論の末、観客に層構造を明示する展示方法を提案し、それが受け入れられたことで、真贋の二分法を超えた視点が提示されることとなった。

ウ 涼は川名慎一から祖父が霧島の作品に線を加えたと聞き、それを贋作とみなして展示中止を主張したが、館長の説得で展示を継続することになった。結果として真相はキャプションに簡単に触れられるだけとなり、多くの観客には届かなかつた。

エ 涼はK-27を真作と判断し、慎一から祖父の関与を聞いても意見を変えなかつた。館長の方針に沿って展示を行い、作品の異質性については公式には一切触れず、

会期を終えた。

問三

川名慎一の人物像として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選べ。

ア 祖父が霧島の作品に行った補彩や線引きを贗作行為とみなし、その事実を世間に広く告発するべきだと考えて涼に強く求めた。本文ではその姿勢が涼との対立を生んでいる。

イ 祖父が霧島の作品に加えた行為を、作品を生き延びさせるための介入として捉え、その意義を涼に伝えるとともに、自らの立場を押し付けずに涼の判断を尊重した。本文では、慎一が修復の記録や祖父の言葉を持参し、対話のきっかけを作っている。

ウ 祖父の関与を隠すことを望み、涼が異質性を記載したキャプションを掲示する意向を知って強く反発した。本文では、慎一が館長に密かに抗議する場面が描かれている。

エ 祖父の仕事を全面的に否定し、作品に残る線や補彩を削除して霧島の原形に戻すべきだと主張した。本文では、その極端な意見が涼に却下される様子が描かれている。

問四

本文中で繰り返される「層」という表現が象徴しているものとして最も適切なものを、ア～エの中から一つ選べ。

ア 支持体から表面のワニス層までの物理的な構造を指すが、本文では美術館の保存・修復記録の技術的説明に限って用いられており、象徴的な意味は持たない。

イ 制作当初からの筆致や素材だけでなく、その後の修復や補彩、経年変化、所有者や保存者の意図など、多様な時間的・人的要素が重なって一つの作品を形作っているという、物理的・比喩的双方の意味を持つ。

ウ 修復作業において意図的に痕跡を隠すために重ねる覆いの層を指し、本文では霧島の贋作を隠すための手口として描かれている。

エ 展示構成におけるテーマ別の並びを指す美術館用語であり、本文では特別展の展示順序を示す比喩的な表現として使われている。

問五

本文全体の展開として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選べ。

ア 涼は科学的調査と人物調査を重ね、K-27の下層に霧島の手、表層に後年の他者の介入があることを突き止める。その異質性を欠陥として隠すのではなく、作品の歴史として観客に提示する方針を提案し、採用されるまでの経緯が描かれている。

イ 涼はK-27の異質性に気づきながらも、慎一との会話で確信を得られず、結果として館長の方針に従って展示を行い、異質性については会期終了まで公表しなかった。

ウ 涼はK-27を完全な贋作と断定し、展示中止を主張したが、慎一や館長との議論を経て真作と認め、異質性の存在を説明しないまま展示に踏み切った。

エ 涼はK-27の異質性を科学的に解明したが、館長の反対により説明の揭示は認められず、慎一だけに真相を語るにとどまった。

問六

本文の主題として最も適切なものを、ア～エの中から一つ選べ。

ア 芸術作品の価値は制作当初の状態を完全に保持することであり、その後の介入や修復は価値を損なうだけである。

イ 真作と贋作という単純な二分法では捉えられない、時間や人の手の重なりを含めた作品の全体像を受け止め、歴史を可視化する視点の重要性。

ウ 修復は作品の外観を美しく保つための手段に過ぎず、来歴や技法の変遷を観客に伝える必要はない。

エ 作者の意図を守るためには、後年に加えられた全ての介入を排除し、原初の形に戻すことが最優先である。

解答・解説

問一（語彙）

（一）正解…ア

解説…「クレーズ」は絵画表面やワニス層に生じる微細なひび割れのこと。経年や乾燥収縮が原因となる。本文ではレーキングライトによって表面のクレーズが浮かび上がる描写があり、これが涼の違和感のきつかけとなっている。

- ・ イ…色むらの説明は別現象。霧島の作風に特徴的という描写は本文にない。
- ・ ウ…剥離は別用語で「フレーキング」などと呼ばれる。
- ・ エ…物理的衝撃による崩れではない。

（二）正解…ウ

解説…「支持体」は絵具をのせる基盤となる素材。本文ではキャンヴァス耳から微粉を採取し、構造分析の基点にしている。

- ・ ア…ワニスは支持体ではなく保護層。
- ・ イ…地塗りは支持体の上の層であり、支持体そのものではない。
- ・ エ…額縁の補強材は支持体とは別。

（三）正解…ア

解説…「リタッチ」は部分補彩のこと。本文では白いドレスの胸元の三角形補彩を具体例として描写。

- ・ イ…全面改作はリタッチではなく「オーバーペインティング」に近い。
- ・ ウ…一時的な化粧直しは「クリーニング」や「グレージング」。
- ・ エ…赤外反射で線を強調するのは撮影処理であってリタッチではない。

問二（内容把握）

正解…イ

解説…

本文では涼が科学的調査（赤外反射・断面観察）で霧島の下描きと後年の介入を確

認。館長や早瀬との議論後、「層構造を明示する展示」を提案し、採用されている。

- ・ ア…館長が疑義を伏せたまま展示という流れは本文と異なる。
- ・ ウ…慎一との会話で贋作とみなした描写はない。
- ・ エ…異質性を隠したまま会期終了は本文と矛盾。

問三（人物像）

正解…イ

解説…

慎一は祖父の行為を贋作とはせず、作品を生かすための介入と説明。修復記録や祖父の言葉を涼に示し、判断を委ねている。

- ・ ア…告発を迫った描写はない。
- ・ ウ…異質性記載に反発する描写はない。
- ・ エ…原形回復を主張した描写はない。

問四（表現理解）

正解…イ

解説…

「層」は物理的構造に加え、制作・修復・経年・所有など時間的・人的な重なりを含む。涼が「真贋の二分法ではこぼれ落ちる現実」として説明する場面が根拠。

- ・ ア…象徴的意味を持たないのは誤り。
- ・ ウ…覆い層Ⅱ贋作隠しの手口という描写はない。
- ・ エ…展示順序の比喩は本文にない。

問五（論理関係）

正解…ア

解説…

涼は科学的調査と人物調査を経て、異質性を欠陥でなく歴史として提示する方針を提案し、採用されるまでを描く構成。

- ・ イ…異質性を会期まで公表しなかったのは事実と異なる。
- ・ ウ…贋作と断定し展示中止を主張した場面はない。
- ・ エ…館長の反対で説明が不許可となる場面はない。

問六（主題把握）

正解…イ

解説…

主題は「真作と贋作を超え、作品が生き延びるための層Ⅱ時間や人の手を歴史として受け止める視点」。

- ・ ア・エ…介入を否定する立場は本文と異なる。
- ・ ウ…観客に伝えないことを是とする立場も本文と異なる。

【第七問】稜線の灯（りょうせんのみ）

山岳小屋の冬支度は、いつだって“音”から始まる。

古い鋼のシャッターを下ろすときの擦過音、油差しの匂いを含んだ蝶番の微かな悲鳴、ストーブの鉄板が温度差に耐えかねて鳴らす乾いた拍子。新藤陸（しんどう・りく）は、その一つひとつに耳を澄ませながら、棚に並ぶ燃料缶のラベルを確認していった。クマ避けの鈴が風に揺れ、小屋の外で雪面がきしむ。十月末、稜線はすでに“冬の文法”に切り替わっている。

小屋番の佐伯が気圧配置図をテーブルに広げた。青と赤の記号の上を、黒い等圧線が指の跡のように重なっている。

「西高東低が決まりそうだ。前線が抜けた後、等圧線の間隔が詰まる。明日は風の走りが早い」

「ホワイトアウトの可能性、ありますね」

「午前は視程が保つかもしれん。だが午後は潰れる」

小屋は主稜線から外れた肩に建っている。北のコル（鞍部）を回り込むトラバースに雪庇（せつぴ）が張る季節だ。陸は窓の外に目をやった。夕光が尾根の縁を薄く染め、風が吹くたび稜線の雪が煙のように流れる。彼はアイゼン（クランポン）とピッケルの刃先を布で拭い、BPS（ビーコン・プローブ・シヨベル）をザックにまとめ直した。

夜、無線が鳴った。コールサインは谷の下の避難小屋。“二人組が主稜線を越えてこちら側に入ったはずが到着しない”という。携帯は圏外、遭難対策協議会の回線に連絡が上がる。

「夜間の探索は出さない」佐伯は即答した。「視程が落ちる。支点も稼げない。判断が死への近道になる」

言い切る口調に、陸はわずかに胸を刺された。救いたい気持ちと、救いに行くべきでない時間とが、山では平然と背中合わせだ。

眠りは浅かった。小屋の梁が風を受けるたびに低く唸った。明け方、気温計は-12℃を示し、東の空が薄く裂けたように白む。佐伯は簡潔に言った。

「午前勝負だ。北コルにフィックスロープ。コンテニユアス・ビレイで通す。お前は先行でラッセル（新雪を蹴り分ける踏み開き）を刻め」

雪面は前夜の放射冷却で硬く、表層だけが風で削れて薄いクラストになっている。踏み抜けば膝上、硬いところはアイゼンが鳴いた。陸はピツケルのスピツェ（石突）でスタンスを作り、一定のリズムで呼吸を刻む。

やがてコルの直下、風は斜面の雪を巻き上げ、可視領域を薄い靄に変えた。雪庇の張り出しは風下へと突き出し、足もとに見えている縁が“地面”である保証はどこにもない。佐伯がショートロープで繋ぎ、支点を雪面に打ったスノーバーで取り、手早くフィックスを張る。

「ここから先は“信じない”で進む。見えている縁も、踏んだ硬さも、風に書き換えられる。信じるのは手順だけだ」

コルを抜ける頃、ビーコンの受信音が微かに拾った。乾いた電子音が雪の向こうから点滅のように届く。陸は方向を探り、等感度サーチの角度を詰める。プローブを刺すと、一度、空を突いた。二度目、柔らかさの質が違った。三度目で、骨のようになかな手応えがあった。

「当たり」

シヨベルが雪を飛ばす。吹きだまりの層は風と温度で硬さが違い、刃の入り不均一だ。胸の高さまで掘ったところで、赤いジャケットの腕が現れた。顔は雪に押しつけられていたが、呼気はまだ白い。佐伯がツェルトを広げ、体幹の保温を優先する。

「名前は？」

「……ハルカ。相澤ハルカ」

声はかすれていた。体温が引き出しから漏れていくように、淡い。動けない理由は右足の激痛。脛骨の変形がズボン越しに伝わる。骨折だ。

もう一人はどこだ。ハルカは唇を震わせた。「……前を、行って。トレースが……消えた」

風は稜線の輪郭を薄くし、白と白の境界線を曖昧にする。ホワイトアウトの前駆だ。陸は地形を頭の内で裏返した。尾根の肩から派生する沢状地形には雪が溜まり、斜度は出ないが表層が乗る。小さいが“流れる”場所だ。

ビーコンはもう一つの信号を拾わない。電源が落ちたか、送信がないのか。佐伯が無線で救助隊へ座標を送った。「UTMで送る。視程は悪化傾向。ヘリ不可、歩行搬送判断」

「この風で搬送？」陸は問うた。

「谷の樹林帯まで落とせば通せる。ここで待つ時間は、凍りの時間だ」

陸はハルカの足をアルミスプリントで固定し、ツェルトごと搬送できる形にまとめる。佐伯が前、陸が後ろ。斜面を外さないようコンパスを腰で感じ、トレースを自分たちで作り返す。ラッセルの深さが膝を超えると、呼吸が音を持った。

視界が潰れ、世界が二人と荷の大きさに縮まる。風は前から来たり横から来たり、音で距離感を狂わせる。人は、白に包まれると、自分の内側の影に迷うのだと陸は知っている。だから、手順だけを信じる——“信じないで進む”という佐伯の言葉は、そのための護符だ。

樹林帯に入ると、風は木々に碎かれ、雪面が言葉を取り戻す。そこで陸は聞いた。かすかな声——風ではない、人の呼ぶ音。

「……こっち」

立ち木の陰、雪の中に青いザックが半ば埋まっている。うつ伏せの男性。顔色は悪いが、体温はまだ戻る位置にいる。彼のビーコンはスタンバイのままだった。

「相澤のパートナー？」

男は唇を噛み、視線で頷いた。

「ビーコン、送信に戻さないと。……ごめん、混乱して」

佐伯が短く息を吐いた。「謝るのは、下りてからでいい」

小屋への帰路は、時間の重さが逆方向にかかった。登り返しは短い、荷は命の重さを帯びている。佐伯は無駄口を叩かず、支点と動作の確認だけを繰り返した。陸は自分の足の裏を、雪と会話させる。スタンスが“違う”と言えば立ち止まり、落ちる前に全てをやり直す。“山は待ってくれない”という言葉は半分正しいが、もう半分は間違いだ――手順に忠実であれば、山は時々、待ってくれる。

小屋の灯が見えたとき、陸の喉は乾いた音を立てた。ドアが開くと同時に、温度が匂いに変わる。ストーブの鉄、濡れた布の繊維、スープに溶けた根菜の甘さ。ツェルトを床に下ろし、保温と水分補給、簡易な疼痛管理。救助隊からの無線が入る。「下から上がる。風は弱まらない。歩と橇（そり）で引き継ぐ」

ハルカが言った。「見えなくなって、怖かった。……音が消えるのが、一番怖い」陸は頷いた。風の音は、時々、心の輪郭線を残してくれる。音が消えると、人は自分の中で迷子になる。

「音の代わりに、手順がある」

「手順？」

「決まりごと。体が勝手にやる“次の一手”。それが生き残る技術の形だと思う」夜、救助隊が到着し、搬送は手際よく進んだ。橇は雪面を滑り、ヘッドランプの列が闇を斜めに切る。小屋に静けさが戻ると、佐伯は古い帳面を取り出した。小屋の記録だ。吹雪で漂泊した登山者、低体温で震えた学生、足を痛めた老人。名前が紙に残るたびに、見えない時間が一枚ずつ重なる。

「お前は、山の何が好きだ」

唐突な問いに、陸は答えを探した。

「……“戻る”ことですかね。怖さから、風から、判断から。戻るために、進む。戻りきれなかった人の分まで」

「難儀な趣味だ」佐伯は目を細めて笑った。「だが、山小屋はそういう場所だ。戻るための灯を置いとく場所」

翌朝、空は砕けた硝子のように晴れ上がった。西の稜線に風が走り、雪煙が旗の

ように柵引いている。二人で小屋の戸を開け放ち、冷たい空気を入れ替えた。

陸は梁に手を置き、鉄がわずかに鳴るのを聞いた。音がある。ならば、まだ大丈夫だ。

彼はザックの中のビーコンを確認し、ピッケルのリーシュを結び直した。下山のトレースは風で消えているだろう。だが、手順は残っている。

稜線の灯は、今日も小屋の窓に薄く揺れている。そこへ向かう足取りを、何度でもやり直すために。

設問

問一

本文中の語の意味として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

(一)「コル」

ア 尾根上で最も高い一点を指し、風の影響を最も受けにくい場所の総称。

イ 二つのピークの間に行ける鞍状の低所で、風が抜けやすく、雪庇の張出しや吹きだまりが生じやすい地形。

ウ 尾根から谷へ落ち込む急傾斜の斜面全般を指す登山用語で、主に雪崩の発生源を意味する。

エ 稜線直下の避難小屋を指す俗称で、冬季登山者が一時的に退避する場所。

(二)「ラッセル」

ア 新雪の表面をスキーで均し、滑走性を高める整地作業。

イ 新雪や吹きだまりを踏み分け、身体で道形（みちがた）を切り開く行為。先頭の負担が大きく、交代が有効。

ウ 氷化した雪面でアイゼン前爪を刺して登る前傾姿勢のこと。

エ 雪面の亀裂を見つけてマーキングする安全確認手順。

(三)「ホワイトアウト」

ア 吹雪で雪が降り積もる現象そのものを指し、視程に影響は少ないが体感温度が著しく下がる気象状態。

イ 地吹雪や雲の流入などで地表と空の境界が消え、方向感覚と距離感が失われる視覚的現象。足もとの起伏や雪庇の縁が認識しにくくなる。

ウ 強い直射光の反射で雪目（雪眼炎）を起こす現象。ゴーグルで防げるため、風の有無は関係ない。

エ 積雪の含水率が高まり雪が重くなる状態の総称で、雪崩発生の直接原因を意味する。

問二

本文の展開について最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 夜間の救助要請を受け、陸は即座に出動を主張するが、佐伯が安全を優先して却下した結果、翌朝までに遭難者の生存可能時間を大幅に失い、発見時にはすでに二人とも意識を失っていた。

イ 翌朝、陸と佐伯はコルの雪庇帯をフィックスロープとコンテナユアス・ビレイで通過し、ビーコンとプローブで一人を雪中から掘り出し、もう一人は樹林帯で発見したうえで、視程悪化によりヘリ要請を見送り、歩行搬送に備えた。

ウ 陸はビーコンの電波を終始拾えず、経験に基づく地形判断のみで谷へ降下して二人を発見したが、装備不備のため搬送が遅れ、結果として救助隊の到着まで小屋で待機するほかなかった。

エ コル直下で雪崩が発生し、陸は単独で滑落したが、自己確保に成功したのち単身で二人を発見・救出し、佐伯は小屋で無線連絡に専念した。

問三

佐伯の人物像の把握として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 安全第一を掲げて現場に出ない管理的立場に徹するが、机上での判断に固執するあまり、実地の救助手順や最新装備の運用には消極的であった。

イ 夜間出動を避ける冷静さと、翌朝の短い天候窓を確実に使う決断力を併せ持ち、支点構築やロープワークを簡潔に積み上げる現場指揮の実務家として描かれている。

ウ 危機において感情に流されやすく、陸の強い要望に押されて無計画な探索に踏み切り、その結果として偶然の幸運で救助に成功した。

エ 理想論を語り行動は控えるタイプで、救助隊到着まで小屋内の保温に専念し、野外での判断や搬送はすべて陸に委ねた。

問四

本文の描写に関する次の説明のうち、最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 「信じないで進む」という佐伯の言葉は、仲間の判断も環境の変化も信用するなどという冷徹な価値観を示し、結果として個々人の単独行動を推奨する合図として機能している。

イ 「音がある。ならば、まだ大丈夫だ」という結末近くの一文は、物理的な聴覚情報の有無を安全判断の唯一の基準にする姿勢を示し、視覚や手順に基づく判断の価値を相対化している。

ウ ホワイトアウトの描写で「白と白の境界線が曖昧に」とあるのは、客観的視程の悪化だけでなく、人が内面で迷子になる心理を重ね、技術(手順)を“祈りの形”として捉える主題につないでいる。

エ 「稜線の灯」は、小屋という建物の灯火そのものを指すにとどまり、戻るための場所という比喩的機能は本文では一切与えられていない。

問五

本文全体の論理展開を踏まえた説明として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 夜間の出動拒否 ↓ 朝の短時間行動計画(コルへのフィックス設定) ↓ 一人目の掘出しと保温固定 ↓ 二人目の樹林帯での発見 ↓ 視程悪化によるヘリ断念と歩行搬送準備 ↓ 小屋での引き継ぎ、という因果と選択の連鎖が、技術と倫理の両面から一貫して描かれる。

イ 夜間に出動しなかった判断の正しさは最後に否定され、もし即時出動していればより迅速な救助が可能だったという反省に物語は収束する。

ウ 装備・手順よりも経験則が重視され、ビーコン搜索は形だけ行われたが、実際には偶然が救助成功の主要因として強調されている。

エ 救助の可否はすべて気象に規定され、人の判断や技術の影響はほとんど描かれないため、物語は自然への畏怖のみを主題として完結する。

問六

本文の主題として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 山で生き残るためには仲間を信用せず、常に単独で判断し行動することが最善である。

イ 自然条件は人の意思を無力化するため、救助活動は天候の回復を待つ以外に有効な選択肢を持たない。

ウ 山では“信じたもの”ではなく“繰り返す手順”を拠り所にするので、見えない環境と内面の恐れを横断し、他者を「戻す」ための灯を絶やさないとという倫理が立ち上がる。

エ 最先端装備の導入こそが遭難を根絶させる唯一の解であり、経験や判断はそれを補完する二次的要素に過ぎない。

解答・解説

問一（語彙）

（一）正解…イ

- 理由…「コル」は二つのピークの間鞍部の鞍部。本文でも「北のコル（鞍部）を回り込むトラバースに雪庇が張る季節」とあり、低所で風が抜ける特徴を表している。

- 他肢…アは「最高点」、ウは「谷筋」、エは「避難小屋」であり誤り。

（二）正解…イ

- 理由…「ラッセル」は新雪を踏み分けて道を作る行為。本文で「ラッセルを刻め」とあり、先行して雪を切り開く描写がある。

- 他肢…アは整地、ウは前爪登攀、エはマーキングでいずれも異なる。

（三）正解…イ

- 理由…「ホワイトアウト」は地表と空の境界が消え、視覚情報が失われる現象。本文でも「白と白の境界線を曖昧に」とあり、心理的な迷いとも絡めて描写されている。

- 他肢…アは降雪、ウは雪目、エは雪崩の説明。

問二（内容把握）

正解…イ

- 理由…本文は、夜間は出動を控え、翌朝にフィックスロープとビーコンで捜索、一人を掘り出してもう一人を樹林帯で発見。視程悪化でヘリを断念、歩行搬送準備という流れ。

- 他肢…アは発見時に意識なし、ウは経験則のみで発見、エは単独滑落など、本文とは異なる。

問三（人物像）

正解…イ

- 理由…佐伯は冷静に夜間出勤を避け、朝に短時間で安全な行動計画を実施。支点やロープワークで現場を率いる描写がある。
- 他肢…アは机上型、ウは感情優先、エは消極的といずれも不正確。

問四（表現理解）

正解…ウ

- 理由…ホワイトアウト描写は「心理的な迷子」と「技術を祈りの形に」というテーマを結びつける。手順の大切さを示す比喩として機能している。
- 他肢…アは単独推奨ではない、イは音だけが判断基準ではない、エは「戻るための灯」という比喩が本文にあるため誤り。

問五（論理関係）

正解…ア

- 理由…本文は夜間出勤拒否↓朝の計画↓掘出し↓発見↓搬送準備↓小屋で引き継ぎ、と行動と判断の連鎖が一貫して描かれている。
- 他肢…イは判断否定、ウは偶然重視、エは自然のみを主題とするなど、本文と不一致。

問六（主題把握）

正解…ウ

- 理由…本文の主題は「見えない環境と内面の恐れを横断し、手順を抛り所にして他者を戻す灯を絶やさないう倫理」。救助・判断・内面の支えを描いている。
- 他肢…アは単独行動推奨、イは待機重視、エは装備万能論でいずれも本文の価値観とは異なる。

【第八問】路地の風

路地裏の店の朝は、表通りより半刻早く始まる。

看板はチョークで「Déjeuner 11:30-」と書かれたままの昨日の時間を残し、換気扇の金属が最初の陽をはね返す。仕込み台に白い布を敷き、包丁を出す。背中でおーブンが予熱の息を始め、スチームコンベクションはまだ眠たそうにランプを瞬いた。

「湊、ミザン・プラス」

師匠の篠崎シェフは、挨拶の代わりにそれを言う。合言葉みたいなものだ。材料・器具・段取りを“前もって揃える”という意味だと頭では知っているが、身体で覚えるのに半年はかかった。

今日の魚は鯖。皮目の銀が、光をすべらせる。うろこを落とし、腹骨をすく。ドリップを紙で拭い、ピチットで余計な水分を抜いておく。鯖は水っぽくなるのがこわい。塩は強すぎると身が締まる、弱すぎるとぼやける。篠崎シェフは横目で見て「塩は、説得でなく、合意」と言った。意味はわからないが、笑ってしまう。

新玉ねぎをスライスして鍋へ。オイル少量、弱火のスエ。焦がすな、色もつけるな。水は足さない。玉ねぎが玉ねぎの水で自分を煮るのを待つ。ピンと立っていた繊維が、時間と熱でふっと落ちる瞬間がある。ここを見逃すと甘みは立たない。

「いい汗、かいてきたな」

「僕がですか、玉ねぎがですか」

「どっちもだ」

砂肝のコンフィは前夜から塩とハーブでマリネ済み。朝、油の中に沈め、低温のおーブンでゆっくり火入れ。脂は時間の貯金箱だ。焦らない限り、裏切らない。ブール・ノワゼットの香りが、まだ静かな店に早すぎる午後の気配を連れてくる。

カウンターに野菜の山。アスパラは袴をとって根元を落とし、皮を薄くむく。ブリュノワーズ(2mm角)の人参とセロリ、エシャロットは香りの骨格。レモンタイ

ムの小枝は、指先で軽く叩いて香りを起こしておく。

「減圧調理でじゃがいも？」「いや、今日はボンム・アングレーズ。水からやさしく」

「ソースは？」「浅利のジュをエマルション。バターは“乗る”寸前で止める」

昼前、路地にパン屋の焼きたての匂いが流れ込む。うちの店は八席しかない。カウンター六、二人掛け一つ。開店と同時に、近所の花屋の矢野さんが入ってきた。首元のスカーフはいつも花柄で、ついでに花粉まで連れてくる。

「今日のリゾットは？」

「新玉ねぎと、ポロネギの白いところ。上にコンフィの砂肝を炙って、レモンタイム」

「夕方まで持つ香りにして」

「午後の機嫌は、昼の香りで決まりますからね」

キッチンには急に、早送りになる。フライパンは熱しすぎる前に油が入って行って、油が薄く波打ったところに鱈の皮目。ジュツという音、即座に火を弱め、押しつけないで、でも密着はさせる。皮が縮む気配を手の重さでいなす。返すのは一度だけ。

横で篠崎シェフが浅利の鍋を振る。白ワインでデグラッセ、蓋、火を落とし、余熱で口が開くのを待つ。濾して、冷える前に冷たいバターを小さく切って入れ、ホイッパーで乳化。エマルションは“勢い”で作って“気配”で止める。

「鱈、皮きれいだ。……ほら、湊」

皿の上、鱈の皮は薄い金色。光の粒が油の上で泳いでいる。側に新玉のコンポテとアスパラのグリル、浅利のエマルション。ハーブは主張しすぎないように、でも最後の鼻に残る余韻を預ける。篠崎シェフが小声で言う。

「皿は、客に届いて完成」

その“届く”のが難しい。カウンターの一番奥に、スーツ姿の年配の男性。一口、二口。表情に情報がない。

「口に残るの、最後どっち？」

僕は訊くとき、なるべく食べる人の語彙で訊きたい。

男性は少し考えて、「潮の音」と言った。

「それだ」とシェフが笑う。厨房の空気が一段階、明るくなる。

午後はケータリング用の前菜盛り込み。スモークサーモンのローズ、キャロット・ラペ、ビーツのマリネ。小さなトラブルはいつも起きる。デギュスタシオン用の小さなレンゲが一つ足りない。僕がシンク下を探していると、洗浄担当の美希が肩で笑う。

「レンゲ、昨日あなたが“ここならわかる”って言って、“ここじゃない”場所にしまった」

「つまり、ここだ」

「つまり、そこだ」

ふたりで同時に同じ引き出しを開け、まるで仕込んだみたいに見つける。くだらな
い一致が、仕込みの疲れをほどく。

夜の予約に、名前の見覚えがある。フードライターの榎。前回来たときは、鴨の
ロティで「皮は軽く、脂は残って」と面倒くさい注文を笑顔で出した人だ。僕の中
の闘志が、勝手に前傾姿勢になる。

「湊、今日の“賄い哲学”は？」

「火は味方で、敵は時間です」

「いいね。敵を味方にしよう」

夜はときどき、厨房が舞台になる。香りは合図、音はキュー、皿は台詞。カウン
ターの目の前、榎さんがメモ帳を横に置き、あえて何も言わない。挑発だ。

前菜は空豆のムースと浅利のジュレ、上にミントの微香。二皿目は鱈を変化させる。
昼は皮のバリ、夜は身のしっとり。低温（真空）で中心温度を88度まで、仕上げに
皮だけ炙る。ソースは新玉のピュレに柑橘の皮を僅かに削り、最後のひと滴で香り
のベクトルを北に向ける。

「なぜ北？」と篠崎シェフ。

「海と風の方です」

「説明が洒落てきたな」

三皿目は――師匠がこちらを見た。「湊、今日の“あなたの一皿”、出してみようか」

喉の奥で、心臓が跳ねた音がした。準備はしていた。けれど、“出す”瞬間の足は、毎回震える。

僕は冷蔵庫から小さな容器を取り出した。新玉ねぎの芯だけをさらに微塵にして、塩とオイルで半日だけなじませたもの。そこに生の桜海老を合わせ、さっと炙ったアスパラの穂先を載せる。そこに浅利のエマルションを、線ではなく点で降らせる。

「甘みと潮と、春の音」

「名は？」

「“路地の風”」

「名付けを覚えてきた」

皿を榊さんの前へ。箸ではなくフォークで、一度に全部を刺して口に運ぶ。メモ帳は閉じられた。代わりに、カウンターに置いた手の指先が、音もなく小さく弾んだ。

「真面目すぎる場所に、小さいいたずらがある。……いい」

彼女の言葉は、褒めるときほど短い。

サービスの終盤、遅れて入ってきた若いカップルのうち、彼女が人参が苦手だと言う。ラペを避けようとする彼女に、彼氏が申し訳なさそうに笑う。

「すみません、子どもの頃から……」

僕は厨房から声をかける。

「苦手な理由、味？食感？それとも記憶？」

「……給食の、甘いのが」

「シユクル・アミ（砂糖の友人）ですね」

僕は人参を細く切り、軽く塩で揉んでから、白ワインと少しのオレンジ果汁、ホルのコリアンダーを一粒だけ。砂糖は使わない。最後に砕いたヘーゼルナッツ。

「“子どもの頃の味じゃない人参”をどうぞ」

彼女はおそるおそる一口。少しして、笑う。苦手なものが、味の中で居場所を変え
る瞬間は、見ていて少し泣ける。

閉店後、換気扇が止まり、店内が自分の足音を返して来る。流しには静かな銀色
の水面。まかないは余ったリゾットに、炙った砂肝を落として、黒胡椒。美希が言
う。

「今日の“路地の風”、名前がずるい。風って皿ですか」

「皿は名乗った瞬間、物語になる。師匠の受け売り」

「ふーん。……それって、料理の詐欺？」

「詐欺じゃなくて、翻訳。季節って言語、店って辞書、僕らは辞書引く係」

「辞書引く係、かつこよくないよ」

「かつこよくない仕事ほど、世界の骨だと思う」

篠崎シェフがコートに袖を通しながら、ふと振り返る。

「湊。今日の“合意”、よかったぞ」

「塩の、ですか」

「塩も。客も。世界とも」

よくわからない。でも、わからないってことは、明日また包丁を握る理由になる。

戸締りをして路地に出る。夜は、昼の匂いを少しだけ残している。パン屋はもう
寝て、向かいの古い喫茶店は“おやすみ”の札。八席の店の、八つの物語。だれか
の苦手が居場所を変え、だれかの記憶が皿の上で別の形になって帰っていく。

指先に残るレモンタイムの香りを嗅いで、僕は思う。食材と格闘するたび、相手
は結局、世界の機嫌だ。火加減は天気、塩は潮目、皿は風。

明日も“合意”が取れますように。

そう願って、僕は店の鍵をポケットに落とした。

設問

問一

本文中の語の意味として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

㊦「ミザン・プラス」

ア 調理器具の手入れを行い、全ての道具を最適な状態に整えること。

イ 調理開始前に食材・器具・段取りをあらかじめ揃え、作業の流れをスムーズ

にすること。

ウ 仕上げ段階で食材を組み合わせ、盛り付けのバランスを整える行為。

エ 加熱調理中の食材を途中で混ぜ合わせ、味を均一にする作業。

㊧「エマルション」

ア 調理中に発生する油煙を凝縮して香りを付与する技法。

イ 水と油のように本来混ざりにくいものを乳化させ、なめらかなソース状にすること。

ウ 食材の下味付けのために、液体に一定時間漬け込む工程。

エ 高温で短時間に表面だけを焼き固める調理法。

㊨「デギュスタシオン」

ア 料理を少量ずつ提供し、さまざまな味を段階的に体験できるコーススタイル。

イ 料理の下ごしらえを行い、客に見せるために食材を並べること。

ウ 同じ食材を複数の調理法で同時に提供し、味を比較すること。

エ コースの最後に出す甘味や軽食をまとめて提供するスタイル。

問二

本文の展開について最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 主人公は師匠の篠崎と衝突しながらも独自の料理を作り続け、最後には一人で夜の営業を取り仕切ることによって師匠の信頼を勝ち得た。

イ 路地裏の小店で仕込みから営業までを描き、昼は常連客とのやり取り、夜はフ

ードライターやカップルなど多様な客との関係性を料理を通じて描き出した。
ウ 厨房での失敗を繰り返す主人公は終始萎縮しており、自分の料理を出す機会も得られず、ただ師匠の指示に従う場面で物語は終わる。

エ 料理人としての成長よりも、店の経営上の困難や食材不足が主題として描かれ、客との交流はほとんど取り上げられなかった。

問三

篠崎シェフの人物像として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 弟子の独創性を認めず、技術偏重で厳しい指導を行うだけの存在として描かれ、ユーモアや柔軟性は見られない。

イ 技術には厳格だが、言葉や比喻に遊び心を持ち、弟子に挑戦の機会を与える柔らかさも併せ持つ人物として描かれている。

ウ 料理よりも経営を優先する人物であり、厨房での技術指導はほとんどなく、客との対応が主だった。

エ 表舞台には立たず、裏方として材料の調達だけを担う人物であり、料理そのものに関わる描写はほぼない。

問四

本文の描写や比喻について、最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 「塩は説得でなく合意」という表現は、食材に力で味を付けるのではなく、適度な調和を探る姿勢を示しており、調理と人間関係を重ね合わせている。

イ 「皿は、客に届いて完成」という言葉は、料理の見た目だけを重視する姿勢を表し、客の反応は重要視していないことを示す。

ウ 「路地の風」という名を付けた皿は、店外の環境をそのまま料理に取り込む試みであり、具体的な風味よりも店名の宣伝が中心であった。

エ 人參嫌いの客への対応は、拒絶を前提とせず食材の印象を変える工夫を描いており、苦手意識を打ち破る発想を物語の温かさとして浮かび上がらせている。

問五

本文全体の論理展開として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 朝の仕込みで魚や野菜を整え ↓ 昼は常連客と軽いやり取り ↓ 夜はフードライターの来店や挑戦の皿を出す緊張感 ↓ 苦手食材の工夫やカップルへの対応 ↓ 閉店後の余韻と自己確認。

イ 朝の仕込みを済ませ ↓ 昼営業では客が少なく店の経営不安が中心 ↓ 夜に客足が戻るが新しい挑戦はなく ↓ 閉店時も課題が多く残る。

ウ 朝は仕込みを行い ↓ 昼営業で常連とのやり取りを描き ↓ 夜の営業は特にトラブルなく順調に進み ↓ 閉店後は日常の片付けで締めくくられ、特別な挑戦や交流は描かれない。

エ 朝の仕込みと調理手順を描き ↓ 昼の営業では常連や新客とやり取り ↓ 夜は師匠と共に挑戦的な一皿を出し ↓ 苦手な食材を工夫する対応も示し ↓ 最後に閉店後の会話で締めるが、昼夜の出来事が入れ替わった形で示されている。

問六

本文の主題として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 厨房という閉ざされた空間で、弟子が孤独に師匠を超えようと挑む姿を描き、料理人の世界の厳しさを強調している。

イ 店の運営や客数、経営の安定など現実的課題に焦点を当て、料理そのものより経営判断や資金面の工夫を描いた。

ウ 食材を扱うことが世界との対話であるという視点を中心に、師匠や客との関係、苦手食材の工夫などを通じて「味わいは人の記憶や関係を変える力を持つ」ことを示している。

エ 調理技術の理論と段取りを徹底すれば、誰でも同じ結果を出せるという合理性を主題にし、感性や偶然性は排している。

解答・解説

問一（語彙）

1. 正解…イ

- 理由…「ミザン・プラス」は調理開始前に食材・器具・段取りを揃えること。本文でも「材料・器具・段取りを“前もって揃える”」と説明されている。
- 他肢…アは器具のメンテ、ウは盛り付け段階、エは加熱中の混合と誤り。

2. 正解…イ

- 理由…「エマルション」は乳化。本文でも「浅利のジュをエマルション。バターを小さく切って入れ、ホイッパーで乳化」と記述あり。
- 他肢…アは燻製、ウはマリネ、エは表面焼き。

3. 正解…ア

- 理由…「デギュスタション」は少量多皿のコース形式。本文で「ケータリング用の前菜盛り込み。デギュスタション用の小さなレンゲ…」とある。
- 他肢…イは下ごしらえ、ウは比較試食、エはデザート提供と異なる。

問二（内容理解）

正解…イ

- 理由…本文は朝の仕込み↓昼の常連↓夜の営業↓フードライター↓カップルへの対応と、料理を通じた交流を描く。
- 他肢…アは師匠と衝突・独立の話、ウは成長描写がなく、エは経営問題中心と誤り。

問三（人物像）

正解…イ

理由…篠崎シェフは「塩は合意」「いい汗、かいてきたな」など比喻とユーモアを交え、弟子に挑戦機会を与える。

- ・ 他肢…アは柔軟性を否定、ウは経営優先、エは裏方のみで本文描写と不一致。

問四（表現理解）

正解…アとエが近いが、最も適切なのはエ。

- ・ 理由…本文では「苦手食材の人参を工夫で克服」という場面があり、温かみを持たせる描写が際立つ。アも意味として近いが、人間関係について述べる意図とは確定しがたい。表現の意図全体を示すのはエ。
- ・ 他肢…イは客の反応軽視と逆、ウは宣伝目的ではない。

問五（論理展開）

正解…ア

- ・ 理由…本文は朝仕込み↓昼常連↓夜挑戦↓苦手食材の工夫↓閉店後、という順。
- ・ 他肢…イは経営不安や客数の少なさが中心で、本文とはテーマが異なる。ウは夜の挑戦や特別な交流が描かれなため不十分。エはほぼ正しいが、「昼夜の出来事が入れ替わった形」という部分が本文と食い違って

問六（主題）

正解…ウ

- ・ 理由…本文の核は「食材と格闘すること⇨世界や人との対話」であり、師匠の比喩や客の反応、苦手食材を変える工夫などが、料理の枠を超えた関係性や記憶の変化を描いている。
- ・ 他肢…ア本文では孤独や師匠を超える葛藤は描かれるが、閉ざされた挑戦や厳しき中心ではない。イ経営的課題はほぼ登場せず、客や師匠との交流がメイン。エ理論だけで結果が保証されるといふ考え方とは逆で、本文はむしろ「火は味方で、敵は時間」という感性や偶然性を重視している。

【第九問】食卓の記憶

台所の匂いというものは、時として言葉よりも雄弁だ。火にかけた鍋から立ちのぼる湯気、焦げつく直前のトーストの香ばしき、切ったばかりの胡瓜の青い匂い――それらは、ただの化学反応や植物の性質にとどまらず、私の記憶を幾層にも呼び起こす。

子どもの頃、祖母が漬けていた糠漬けの香りを、私は鮮明に覚えている。木の樽の蓋を開けると、酸味と塩気が混ざり合い、鼻腔の奥をつんと刺激した。祖母は手をよく洗い、指先を畳むようにして糠床を混ぜた。私はそれを横でじっと見ていた。漬物が出てくる食卓は、特別なごちそうではなかったけれど、家族の会話を支える柱のようだった。いま思えば、あの独特の発酵臭は、家の息づかいそのものだったのだ。

季節ごとに、食の記憶は表情を変える。春先には、庭の露や山菜を天ぷらにした香り。油の泡が細かく弾け、塩をふっただけでほろ苦さが舌に残った。夏は麦茶の水筒。冷蔵庫を開けるたび、湿った麦の香りが顔を包み、汗をかいた体を瞬時に冷ました。秋は新米。炊き立ての湯気の白さに、何よりも安心を感じた。冬は大根を煮る匂い。味噌汁に沈む白い輪切りが、寒さをしのぐ防波堤だった。

食べ物の味は、必ず人の顔と結びついている。弁当に入った卵焼きを思い出すとき、私は同時に母の不器用な笑顔を思い浮かべる。母は甘い卵焼きが苦手だったらしく、いつも塩気の強い出汁巻きを焼いた。友人の弁当には黄色く甘い卵焼きが入っていて、羨ましいと思ったこともあったが、大人になって母の卵焼きを再現してみると、その塩気は母の性格の延長のようで、懐かしさよりも切なさに近い感情を運んできた。

旅先で出会った食も、記憶の層を厚くする。学生時代に訪れた瀬戸内の島で、漁師の家に泊めてもらったことがある。朝食に出てきたのは、網から揚げたばかりの鰯の丸干しだった。焦げた皮の下から脂が滴り、島の空気の塩分と混ざって、いま

まで知っていた鰯とはまるで別物のように思えた。島の老人は「これは海の時間を食べているんだ」と言った。その言葉は冗談半分だったが、口の中で小骨を噛み砕くたびに、数十年を生きてきた海の味がする気がした。

不思議なことに、記憶の中で最も強く残る食べ物は、豪華なものではない。むしろ、ありふれた米や野菜、安価な魚だ。高級な食材の記憶は、写真のように鮮明ではあるが、どこかよそよそしい。日常の食べ物こそが、体と心に密着して、記憶の奥でくすぶり続ける。

やがて祖母が亡くなったとき、葬儀の後に親戚一同が台所に集まり、誰からともなく「糠漬けをどうしよう」と話題になった。誰も祖母ほど丁寧に糠床を世話する自信はなかった。結局、樽は処分されてしまったが、その夜、台所に残った微かな香りは、祖母の声や笑い方呼び覚ますのに十分だった。食べ物は、なくなってもなお、人の存在を留める。

私はいま、自分の家で小さな糠床を持っている。毎朝かき混ぜるたびに、祖母の手の動きを思い出す。味は違う。香りも違う。けれど、違うというその感覚が、祖母と私のあいだに新しい橋を架けている。

食とは、単なる栄養摂取ではない。それは人の時間を保存する器であり、他者の存在を呼び寄せる装置でもある。食卓の記憶は、個人のものにとどまらず、文化や土地をも背負っている。米の湯気に安心を感じるのは、私だけではないはずだ。

私が糠床を混ぜる手を止め、ふと空を見上げるとき、そこに祖母の姿を探しているわけではない。むしろ、糠の香りを通して「いまの自分の時間」を確かめているのだ。食べ物の匂いや味は、過去と現在を結びつけると同時に、未来を形作るための言葉でもある。

人はパンのみにて生きるにあらず——そう言われる。しかし、パンがあるからこそ、私たちは言葉を交わせるのかもしれない。食べ物は、私たちにとって最も身近な記憶の翻訳者であるのだ。

設問

問一

本文中の語句の意味として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

1. 「糠床を世話する」

- ア. 糠を毎日新しく入れ替えて、発酵を一から繰り返すこと。
- イ. 糠と野菜を混ぜ返し、発酵状態を保ちながら味を安定させること。
- ウ. 樽の外側を掃除して見た目を整え、保存に適した環境を作ること。
- エ. 糠を乾燥させて保管し、後で漬け直せるよう準備すること。

2. 「防波堤だった」

- ア. 冬の寒さを和らげ、心身を守る支えのような存在であった。
- イ. 海辺の記憶を呼び起こし、祖母の暮らしを思い出させる比喩である。
- ウ. 鍋の中で味が広がらないよう、外部からの干渉を防ぐ意味である。
- エ. 漬物が時間を跳ね返す性質を示す象徴的な表現である。

問二

本文の展開について最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア. 祖母の糠漬けを出発点とし、漬物の記憶が家族の歴史を象徴していると論じ、その後も漬物という題材を中心に据えて文章が進み、他の料理や食材はほとんど登場せずに、糠床をどう継承するかという一点に絞って描かれていた。

イ. 季節ごとの食体験、母の卵焼き、旅先での鰯、高級食材との比較、祖母の死と糠床の行方、さらに自らの糠床への取り組みへと続くなど、複数のエピソードを連ねながら、食べ物が家族や記憶、土地や文化と結びつく様子を多層的に描いていた。

ウ. 豪華な料理を味わった体験を中心に据え、食の楽しみは特別な場のみ宿るところを強調し、日常の食事や家族との関わりについてはほとんど触れず、むしろ日常と非日常を切り離して比較する視点で展開していた。

エ. 母や祖母など身近な家族への言及を避け、地域の伝統料理や文化的な違いに焦

点をあて、各地の調理法や食材の特徴を比較することに多くの紙幅を割き、個人の感情や家族の記憶はほとんど描かれなかった。

問三

本文中の表現の効果について最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 「海の時間を食べている」という老人の言葉は、鰯という具体的な食材を通じて、人間の短い体験の背後にある自然の悠久さを直感させ、単なる味覚以上の重層的な意味を読者に印象づけている。

イ 母の卵焼きに関する描写は、単に味覚的な特徴を示すにとどまらず、友人の弁当との比較を交えることで、家庭ごとの価値観や子どもの心理的な揺れを表現し、食べ物が社会的・感情的な差異を浮かび上がらせる装置となっていることを示している。

ウ 糠床の香りを「家の息づかい」と表現した部分は、家庭という空間全体を一種の生き物のように捉える比喻であり、読者にとって食と生活の不可分性を強調し、発酵の営みを人の営みに重ね合わせる効果を持っている。

エ 新米の湯気を「安心」と結びつけた描写は、単なる味覚の満足にとどまらず、人々が共通して抱く安心感を喚起することで、日常的な食の体験を普遍的な心理や文化に昇華させる働きを果たしている。

問四

本文全体の展開として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 祖母の糠漬けの記憶から出発 ↓ 四季ごとの食の記憶 ↓ 母の卵焼きのエピソード ↓ 旅先の鰯の味 ↓ 豪華な料理との比較 ↓ 祖母の死と糠床の処遇 ↓ 自分の糠床の実践 ↓ 食と記憶の省察。

イ 季節ごとの食の記憶から始まり ↓ 旅先での鰯 ↓ 母の卵焼き ↓ 豪華な料理の印象 ↓ 祖母の漬物 ↓ 現在の糠床 ↓ 結論へ、といった順序で描かれており、

祖母の存在は終盤に置かれている。

ウ 母の卵焼きの回想から始まり ↓ 季節の食の記憶 ↓ 祖母の糠漬け ↓ 旅先の鰯 ↓ 豪華な食材の体験 ↓ 現在の自分の実践 ↓ 結びの省察、という順序で展開されている。

エ 旅先の鰯の描写を冒頭に据え ↓ 豪華な料理の記憶を比較し ↓ 母や祖母の家庭料理を後半で回想することで、非日常と日常の落差を際立たせ、結びではその両者を文化的に比較する視点で締めくくられている。

問五

本文の主題として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 食卓の味は家族や文化を象徴するが、実際には経済的背景や家庭の制約に左右されるものであり、食体験は社会的地位を映し出す鏡であることを強調している。

イ 豪華で非日常的な料理こそが記憶に強く残り、人々はそうした特別な味を通じて時間や過去を思い出すことができるという観点が繰り返し示されている。

ウ 食べ物の味や香りは、家族や人との関係を呼び覚まし、過去と現在をつなぐと同時に、未来を形作る力を持つことを示しており、日常の平凡な食こそが人の記憶を深く支えるのだという視点が一貫して描かれている。

エ 各地域の食文化の差異を比較することを通じて、人間の食生活がどれほど多様であるかを論じ、個人の記憶や感情に左右されない客観的な「食の文化史」を描こうとしている。

解答・解説

問一（語彙理解）

1 「糠床を世話する」

正解：イ

解説：

- 本文では「祖母は手をよく洗い、指先を畳むようにして糠床を混ぜた」と描かれており、日々かき混ぜることで発酵状態を保つ作業を指している。
- アは「毎日入れ替える」としているが、糠床は継続して使うのが基本で誤り。
- ウは外側の掃除であり、本文の趣旨と違う。
- エは乾燥保存で、本文の「毎朝混ぜる」イメージと異なる。

2 「防波堤だった」

正解：ア

解説：

- 本文では「冬は大根を煮る匂い。味噌汁に沈む白い輪切りが、寒さをしのぐ防波堤だった」とある。これは冬の寒さを和らげ、心身を支える存在という比喩であり、安心や支えの意味を持つ。
- イは海辺の記憶という解釈だが、本文にその文脈はない。
- ウは料理工程への解釈で誤り。
- エは「時間を跳ね返す性質」というのも本文にない。

問二（内容理解）

正解：イ

解説：

- 本文は、祖母の糠漬けから始まり、四季の食体験、母の卵焼き、旅先の鰯、高級食材との比較、祖母の死と糠床の処遇、そして現在の自分の糠床へとつながる——という複数のエピソードを通して、食が人・記憶・文化と結びつ

く様子を多層的に描いている。

- ・ アは漬物中心に終始しており、母や旅先のエピソードなど他の要素が抜け落ちている。

- ・ ウは豪華な料理を中心に据えており、本文の重点と逆。

- ・ エは地域文化重視で、本文にあった家族の思い出や個人的な感情は軽視されてしまっている。

問三（表現理解）

正解：ウ

解説：

- ・ 本文中「糠床の香りは家の息づかい」の表現は、家庭空間そのものを一種の生き物として捉える比喩。発酵Ⅱ生活、人Ⅱ営みという対応関係を生み出し、読者に「日常の匂いと記憶の不可分性」を強く印象づけている。

- ・ アも部分的には正しいが、「海の時間を食べている」は印象的な比喩であり、本文の主題の一部を支えるものの、糠床ほど全体の中心ではない。

- ・ イは母の卵焼きの描写を経済的制約に寄せすぎしており、本文では心理や家族の差異の方が重視されている。

- ・ エも良いが、新米の湯気は部分的表現であり本文全体の要点とは言い難い。

問四（論理展開）

正解：ア

解説：

- ・ 本文は、「祖母の糠漬け」↓「四季の食の記憶」↓「母の卵焼き」↓「旅先の鰯」↓「豪華な料理の比較」↓「祖母の死と糠床の処遇」↓「自分の糠床」↓「食と記憶の省察」という順序。家族・日常・旅・文化と広がり、最後に個人の現在に収束する構成。

- イは祖母の登場が遅く、本文の印象とは異なる。
- ウは母を冒頭に置いたため順序が大きく変わる。
- エは旅先を冒頭に据え、本文と逆転構造になっている。

問五（主題）

正解：ウ

解説：

- 本文全体を通じてのメッセージは、「日常の食べ物は家族や人の記憶を呼び起こし、過去と現在をつなぎ、未来を形作る」。糠漬け・卵焼き・旅先の鰯・新米の湯気などが、記憶の翻訳者として描かれている。
- アは経済的背景を強調しすぎで本文の感情や記憶性を軽視。
- イは豪華な料理を中心視しており、本文の趣旨と逆。
- エは文化比較的で、個人の感情や家族の記憶を無視してしまっている。

【第十問】学校と未来

最初にその噂を聞いたのは、三学期の始業式の二日前だった。町の放送塔から流れる朝のチャイムが、湿った空気に遅れて届くころ、商店街の端にある理髪店の椅子で待っていた私は、鏡越しに店主の口の動きが曇るのを見た。乾いた髪の毛が首筋に落ちるたび、言葉は少しずつ輪郭を持ち、「統合」とか「来年度から」とか「校舎は閉じるらしい」とか、たしかにそれは耳でなく皮膚に届く種類の知らせだった。

町立桐丘小中学校——山裾に貼りつくように建てられた、灰色の校舎。春になると斜面の桜が校庭に花びらの風を降らせ、秋には櫟の並木が葉裏を返して音の川をつくる。校門から坂道を見下ろすと、雨の後には舗装の隙間から湯気のように土の匂いが立ちのぼった。私にとっては単なる勤務先であり、同時に、教わる側だった頃の時間が未だに薄く漂う場所でもあった。

「先生、聞きましたか」理髪店の主は耳元を払うついでに声を潜めた。「町のほうで、もう決めたみたいですよ。児童数、半分以下ですからね」

私は曖昧に頷いた。教育委員会から正式な通達は来ていない。だが、町の噂はたいてい現実の半歩前を歩く。半歩というのは、足を止めて振り返る余裕を与えるに足る距離であり、同時に、どう足掻いても追いつけないと知らせる残酷さでもある。

学校の裏門をくぐると、冬の光が校庭の砂に低く流れていた。鉄棒の影が長く、体育倉庫の錠前は冷たく、廊下のガラスは遠くの山をうつして曇っている。職員室のストローブにはすでに火が入り、湯気の立つやかんが小さく鳴っていた。事務の田村さんが封筒を手に、私を見た。

「坂東先生、教育委員会からファクスです」

白い紙には淡々とした黒い文字。件名は「桐丘小中学校の今後の在り方について（通知）」。通知はいつも「今後の在り方」を語るが、そこに描かれる未来の図は、いつも現在の輪郭を削っていく。小規模校の課題、地域資源の有効活用、児童生徒の学びの機会均等——言葉は正しく、正しさゆえにひんやりしていた。最後の行に

「令和〇年度末をもって閉校」とあった。

椅子に腰を下ろすと、座面が冷えていることに遅れて気づく。窓の外、竹林が風で重なり合い、かすかに軋む音を立てた。背後から、教頭の山田先生が入ってきた。四十代半ば、ずっとこの学校で働き、誰よりもここに物語を重ねてきた人だ。

「坂東先生、見ましたか」

私は紙を差し出した。「見ました」

「正式決定、か」

言葉の終わり、教頭の視線がわずかに空を泳いだ。私たちは同時にストーブの上のやかんを見て、それから、何かをあきらめる代わりに何を始めようかという顔で、同じ沈黙を挟んだ。やかんの口から上がる白い息は、ほどなく天井の白さに溶けて消える。

始業式の日、体育館の床は磨かれて、薄青いワックスが冬の光を寝かしつけていた。壇上に並ぶ椅子の数は、去年より二つ減った。吹奏楽部は、今年は「部」と言うには心許ない人数になり、ドラムの前には譜面台が一つだけ立っていた。全校児童生徒合わせて五十七名。私はその数を何度も頭の中で数え、数えるたびに一人分の顔を思い浮かべ、そして、やめた。数は顔とは違う。顔は名前、名前は声で、声は、消えない。

式の最後、私は壇上に立った。ここでは国語を教えている。教科書の中の物語や詩は、黒板の上で粉のように広がり、それが子どもたちの今日の言葉と混じって、時々、思いがけない色になる。「言葉にしてごらん」と言うたびに、私は、自分がそれを誰よりも必要としているのだと感じる。

「みんなに、大切なお知らせがあります」

体育館の空気が、瞬時に別の密度に変わった。寒さではない。音の余白が、広くなったのだ。私は端的に、しかしできるだけ丁寧にした。町の方針、人数のこと、統合のこと、そして、今年がこの校舎で過ごす最後の一年になるだろうということ。言葉は、宙に置かれて、誰のものでもない時間を少し漂った。

最前列で、六年の桂太が眉を寄せた。彼は足が速くて、作文のときはいつも書き出しに時間がかかる。隣の玲奈は、手袋を握りしめている。中学の方の最上級生、三年の麻耶は、視線をまっすぐこちらに向けていた。まっすぐすぎる視線は、時に私の言葉の粗を探す。粗は、ある。私はそれを隠さない。

「最後の一年だからと言って、特別に何かを押しつけるつもりはありません。いつものように、いつもの勉強をします。ただ、いつもの中に“最後”という言葉が混じることは、避けられないかもしれません。だからこそ、今年の一つひとつを、あなたたち自身の言葉で受け取り、あなたたち自身のやり方で残してほしい」

「残すって、どうやって？」と、後ろの方から声がした。声の主は、たぶん、声の出し方でわかる。小さな笑いが起こり、緊張がほどける。

「方法は、いくつでもあります。ノート、写真、録音、絵、歌、匂い、触った感触、目を閉じたときに思い出す音。なんでもいい。ここにいるみんなは、今年の終わりに、何か一つ“持って帰る”。私たち教師も、持って帰る。約束します」

解散の号令がかかる前、体育館の裏口が開いて、外の光が一線、床に走った。誰かが「寒っ」と言い、誰かが「でも気持ちいい」と言った。私はその二つの言葉の間に、これから繰り返される選択の小さな模型を見た。寒いのに外へ出るか、気持ちよさを逃さないか。少しの不快を飲み込み、少しの欲びに手を伸ばすか。学校という場所は、そういう小さな決断の練習場だ。

その日の放課後、古い資料室に入った。棚の最上段に、表紙が色褪せた文集が重なっている。昭和四十年代の「桐丘の子」、平成初期の「坂道通信」。紙は黄ばみ、インクは薄くなっているのに、文字は生き物のように踊っていた。椅子に腰かけ、適当に開いたページを読む。ある年の卒業文集に、こんな一節があった。

——校庭の真ん中の水たまりに、空がはまっていた。そこに石を投げたら、空が壊れるかと思ってやめた。代わりに、靴で泥を踏む音をきいた。音は空を壊さなかった。

私は思わず笑ってしまった。名前を見れば、かつて私が担任した生徒の父親の名

だった。彼の息子は今年、中学の二年生だ。時間は奇妙な編み目をしている。かつての言葉が、別の時代の子どもの歩幅に合わせて現れる。親子は似る。似ないところも、似ている。

資料室の窓から、校庭の隅に積まれた青い跳び箱カバーの山が見えた。破れたところを養生テープで塞いだ跡が何本も走っている。手の跡、足の跡、声の跡。物にも記憶がある、という言い方は陳腐だが、陳腐さは真理に近づくときの摩擦音でもある。

その夜、町の集会所で臨時の説明会が開かれた。冷たい蛍光灯の下、折り畳み椅子が整然と並び、前方のスクリーンには「今後の在り方」のスライドが映った。教育委員会の担当者は誠実だった。彼らの言葉も、きっと何度も推敲され、削られ、磨かれてここに置かれている。私はそれを理解し、同時に、理解したくない誰かの顔も探した。

「統合により、教育環境の充実が――」

言葉は正しい。だが、正しさが人の個別の顔に触れようとするとき、その表面には必ず小さなざらつきが現れる。後方の席で、年配の女性が小さく手を挙げた。彼女はかつて学校給食の調理場で働いていた人で、味噌汁の塩加減で季節を聞き分けた。

「先生方は、新しい学校へ行かれるんですか」

「多くは統合先へ異動になります。配置の詳細は、来年度の人事で決まります」

「子どもたちは、バスで通うんですね」

「はい。通学手段は町が責任をもって――」

質疑は続いた。反対の声も、賛成の声も、賛成だが心が痛むという声も、どれも正しく、どれも未完成だった。私自身の胸にも、賛成と反対の境界線は一本では引けないまま、何本もの鉛筆が渦を描いていた。

帰り道、集会所を出ると、夜気が頬に湿った刃を当てた。空は驚くほど澄んで、山の稜が月の光に薄く縁取られている。遠くで、誰かの家の戸が閉まる音がした。

私は歩きながら、今日一日が自分の中に残した音を一つずつ拾った。鏡越しの噂の音、やかんの小さな鳴り、体育館の余白、文集の紙が指に擦れる音、蛍光灯のうなり。音は言葉より正確に、今日という日を記録している。

家に着くと、机にノートを広げた。表紙に、小さく「最後の一年」と書いた。教室では「最後」を過度に口にしないと決めたのに、自分のノートには最初の行にそれを書いた。矛盾は、支えにもなる。私は文字を置き始めた。校庭の砂の匂い、廊下の冷たさ、子どもたちの顔、それぞれの名前。書きながら、私は、この一年の「記録」を授業の中心に据えようと思った。作文でも、詩でも、絵でも、古いラジカセで録音してもいい。集めて、束ねて、最後の日にひらく。形がつくものは残り、形になりきれないものも、残る場所を用意する。

翌朝、黒板にチョークで大きく書いた。「記録係、募集中」。教室に入ってきた子どもたちは、それを見て顔を見合わせ、すぐに紙を取りに走った。桂太は「運動場の風担当」を名乗り、玲奈は「匂い係」を希望した。匂い係、とは何だろうと聞くと、「給食室の廊下と、図書室の本の匂いを集める」と言う。どうやって、と訊ねると、彼女は胸を張った。「方法は、これから考える」

中学の教室でも同じことをした。三年の麻耶は、黒板の前に立って私の書いた字を読み、笑わず、頷かず、ただ一步前に出た。「私、音」。そう言って、彼女は机を引き出しから古いICレコーダーを取り出した。父親の仕事で使っていたものだという。「朝の校門の音、階段の音、チャイムの前の沈黙の音。集める」

放課後、私は職員室の片隅で、ひとりの先生の机に寄った。社会科の大槻先生。還暦が近く、黒板の地図を手で描くのが妙に上手い。「大槻先生、最後の一年、授業どうしますか？」

彼はメガネを外し、レンズを拭きながら言った。「地理帳を閉じる時間を増やそうと思う。校庭から見える山の名前を子どもたちの言葉で付けさせる。川の曲がり角に、来年も残る名前を置いていく」

「名前は残りますか」

「残るさ。紙に書かれていなくても、誰かの口に残る。地図は紙より先に人の歩き方に引かれる」

廊下を歩くと、壁に貼られた過去の連絡表の端が、空調の風でわずかにめくれていた。体育館からは、小さな太鼓の音が聞こえる。吹奏楽部が太鼓だけで練習しているのだろう。音は、足りないほうが、強くなることがある。欠けは、輪郭をくつきりさせる。

自転車置き場の屋根の下、二年生の少年が一人でサッカーボールを足元で扱っていた。トラップして、少し浮かし、背中で受けるまねをして笑う。私が近づくと、彼はボールを止めて言った。

「先生、学校なくなるの、ほんと？」

私は「なくなる」という言葉を反芻してから、「ここでの学校は、ね」と答えた。「学校は、どこかへ移る。でも、ここにあった“学校”が全部なくなるわけじゃない。たぶん」

「たぶん？」

「たぶん、だよ」

少年はボールを指先でつつきながら、うん、と言った。それは答えではなく、返事でもなく、言葉の居場所を確かめる合図のようだった。彼はそれから、ボールを蹴らずに両手で持って、屋根の柱をぐるりと回った。動作に名前はないが、名前のない動作は、それ自体で記憶の形になる。

夕暮れが校舎の窓に重なり始めるころ、私は教室の電気を消して、窓際に立った。ガラスの向こうに、さっきまで子どもたちが走っていた校庭がある。砂の上に、誰かの足跡が複数の方向に交差している。交差点は、誰のものでもない。だからこそ、そこは誰のものでもある。私は黒板に残ったチョークの粉を指で払って、掌に白い薄膜を作った。これを何と呼ぼう。塵か、雪か、言葉の残り香か。もしもこの粉に耳があれば、今日という日の音を、どれだけ覚えていられるだろう。

その夜、私はまたノートを開いた。最初のページに、今日の授業の板書を写し、

子どもたちが名乗った係の名を書き、集会での言葉を反芻し、資料室で読んだ文集の一節を抜き書きした。ページの最後に、思いつくままに書いた。

——学校は、場所ではなく、かたちを変える声の集まりだ。声は、器が変わっても、しばらくは同じ音色を保つ。やがて別の音と混ざって、新しい和音になる。それを未来というのだろう。

ペン先が止まったとき、窓の外で風が家の角を曲がった。風にも通学路があるのだ、とふと思う。明日も、同じ角を同じように曲がるだろうか。少しでも違うだろうか。違いは、記録されるだろうか。私はペンを置き、灯りを落とした。

翌日から、学校の時間は少しだけ厚みを増した。子どもたちが廊下で立ち止まり、耳を澄ませる回数が増えた。給食室の前で、玲奈が小さな瓶に空気を集めるふりをする。麻耶は掃除の時間、ほうきの先が廊下を撫でる音を「レコーダー」に近づけた。桂太は校庭の風上に立って、どちらから吹くと砂がどんな音を立てるかをノートに記した。誰も「最後」を口にしない。けれど、最後が薄く混じった時間は、人をすこし丁寧にする。それは悲しみの予習ではなく、喜びの復習に近い。

放課後の職員会議で、教頭が提案した。「三月に、最後の文化祭をやりませんか。名前は、文化祭ではなく、“記録祭”。子どもたちが集めたものを、町の人たちと見たり聞いたり、触れたりできるように。展示と発表と、匂いのブースも」

匂いのブース。誰かが笑った。だが、その笑いは、すぐに賛同の気配に変わった。校長がゆっくりと頷いた。「いいですね。記録は、残すためにあるけれど、残すだけが目的じゃない。集まって、同時に確かめるために必要なんだ」

会議が終わるころ、窓の外の空はすでに群青で、体育館の窓から漏れる光が、校庭に薄い四角形を描いていた。私はその四角形を見ながら、ああ、ひよつとすると、この一年は、最後のためではなく、次への最初のために与えられたのかもしれない、と考えた。最後を撫でる手つきは、最初を迎える手つきと、たぶん、よく似ている。

帰り際、昇降口の掲示板に、誰かが書いた小さな紙を見つけた。「朝のにおい…体育倉庫の鍵の金属／ぬれたマット／ストーブの灯油」。署名はない。私はそれをそっ

と外し、ポケットに入れた。持ち去るのではない。私のノートに、一度だけ貼って、すぐ戻すつもりだった。紙の繊維に移る匂いが、私の掌に残るのを、たしかめたかった。

外に出ると、山の端に星が一つ、早すぎる合図のように点いた。私は校門の鍵をかける。金属が噛み合う音は、日によって微妙に違う。今日は、少し乾いた音だった。乾いた音は、よく響く。響きは、遠くまで届く。遠くへ届く音を、私は今夜、ノートの余白に描いてみようと思った。円でもなく、線でもなく、音が進むときに残す見えない跡のかたちを。翌朝、その跡を指でなぞって、教室の黒板に新しい日付を書く。チョークの白さが、今日も薄く指に残るだろう。これはたぶん、終わりの準備ではない。始まりの予感だ。

閉校の知らせは、町の外側に薄く伸びていた見えない糸を震わせ、遠く離れた場所にいる人たちの胸ポケットの内側にまで小さな振動を届けたらしい。最初に学校へ顔を出したのは、東京で働いているという若い夫婦だった。玄関で靴を脱ぎながら、夫が「あ、まだ土の匂いがする」と言い、妻は「下駄箱の木、こんなだったよね」と笑った。私は案内役を買って出て、ふたりを校庭と廊下へ連れ出した。

「ここで、僕、初めて跳び箱の六段が跳べたんです」

夫は体育館の扉の前で立ち止まり、ガラス越しに青いカバーの山を見た。彼の記憶は、はっきりと身体の高さを持っていた。六段――それは数字でありながら、彼の足と膝と掌の距離だった。私は鍵を開け、体育館の灯りをつける。冬の光が人工の白に薄く重なり、床のワックスが時間を吸い込み返すように鈍く光った。

「跳べた日の前の週まで、最後に膝が折れて、手のひらが熱くなって、それで泣いて帰った。家で父が台所の踏み台をひっくり返して、『お前は怖がり方がうまい』って言って。変な褒め方ですよ。でも、あの日から怖がり方をやめるんじゃない、怖がり方を変える練習をした。ここで」

妻が横から、「私は図書室」と言った。「静かで、でもぜんぜん静かじゃなくて、本が背表紙の内側で喋ってた」

私は図書室の鍵も開けた。重いドアの蝶番が、長いあくびみたいに音を立てる。中は少し乾いた紙の匂いがして、ストーブの使われていない金属の冷えが棚の隙間から漂っていた。妻は書架の端を指でなぞり、指先の埃を見て笑った。

「埃、安心する。すぐには捨てられないものがここにあるってことだから」

ふたりはしばらく、言葉を交わさずに歩いた。私も何も言わなかった。図書室は、黙っている人たちの呼吸で満ちるときがいちばん豊かになる場所だ。妻はやがて、貸出カードの残った本を引き抜き、裏表紙のポケットからカードを引き出した。名前の欄に、丸い字で自分の姓が並んでいるのを見つけて、頬に笑いが浮かんだ。

「この名字、もう別の名字になったんだよね。でも、ここには昔の私がいる。次に借りた人の名前、あ、同級生だ。……あの日の放課後、私、返し忘れて走って帰ったのを思い出した」

記憶は、忘れたことの中に潜っている。私はふたりを玄関まで送り、名簿に名前を書いてもらった。「記録祭」の案内も渡すと、彼らは「来ます」と短く言った。その短さは、約束を軽くするためではなく、約束を逃がさないための短さだった。

その週の土曜日には、背広の襟に校章のピンを挿した初老の男性がやって来た。町役場に勤め、定年まで勤め上げたという人で、彼は昇降口の前で立ち止まり、まるで信号を待つみたい、長い時間をそこで過ごした。

「ここで、集合写真を撮ったんです。昭和四十三年の春。桜が、なぜか雪みたいに見えて」

私は写真のアルバムを資料室から持ってきた。彼は自分の若い顔を見つける前に、教師たちの顔を一人ひとり指差した。「この先生は、怒るときに唇を噛んだ」「この先生は、靴音で機嫌がわかった」。それは本人たちを生き返らせる呪文のようで、私は合の手を入れずに、彼の指がページをめくる速度に身を預けた。

「私はね、ずっと会計の仕事をしてきた。数字に名前をつけることはない。でも、ここでは数字の前にいつも名前があった。点数も、背の順も、出席番号も、名前が先にあった」

彼は最後に、廊下の掲示板の前で立ち止まり、掲示物の角をそっと押さえた。

「紙の角がめくれると、学校は生きてますね」

私は頷いた。風は、学校の言葉を日々少しずつ書き換える編集者だ。

ある日曜日、校庭にバイクの音が響いた。音は派手だが、停まったときの身のこなしは静かで、ライダーはフルフェイスを外すと、意外に柔らかい目をしていた。聞けば、二十年前の卒業生で、隣町で整備工場を営んでいるという。

「先生、俺、ここで『書けない子』だったんですよ。作文で二行目から止まって、鉛筆が汗で滑るし、消しゴムのカスが黒板の字みたいに机の上に積もっていった。なのに今、毎日、伝票を書いている。部品の型番、作業記録、見積りの金額、ぜんぶ書く。書けるんすよ」

「どうして書けるようになった？」

「誰かに渡すために書くようになったから、かな。あの頃は『正解』を渡そうとして、渡す相手の顔が見えてなかった。今は、相手がいる。『またお願いします』って言われたら、次、もっと丁寧に書ける。……ここにいたときに、もっとそれを教えてもらってたんだと思うんすけど、当時の俺がそれを拾えてなかっただけかもしれない。すみません」

謝る言葉に宿る少しの照れを、私は受け取って首を振った。「拾い直す時間って、ありますよね」

彼は校庭の端のイチヨウの木を見上げた。「ここでキャブレターの分解図、よくノートに描いたんですよ。本当は授業中に描いたら怒られるんすけど、怒られた記憶って、意外とあつたかい。先生の声の出し方、覚えてる。『今はそれじゃない』って言い方」

「言ってたかもしれません」私は笑った。「今も言っています。『今はそれじゃない。でも、いつかそれが必要になる』って」

彼は頷き、ヘルメットを小脇に抱え直した。

「記録祭、来ます。バイクで来たら、うるさいですか」

「うるさい音、待ってます」

卒業生たちは、音の種類を増やしながら戻ってきた。赤ちゃんを抱えた若い母親がベビーカーの車輪を昇降口の段差に当てて、「ここ、段差あったね」と笑い、老人は杖で体育館の床を軽く叩いて「この響きは昔と同じだ」と言った。ある女性は、給食のメニュー表のコピーを見て涙ぐんだ。「揚げパンの字が、先生の字だ」と。私は自分の字が、誰かの喉の奥の柔らかいところに触れるときの不思議な責任を、遅れて感じた。

卒業生だけではない。学校と直接の縁のない町の人たちも、ふとした用事のついでに校門をのぞき、敷地内に一步踏み込んでから、「やっぱりやめとこう」と引き返すような仕草をした。踏み込むことと、踏みとどまること。その境界には、思い出の濃度が関わっている。思い出は濃いほど重く、重いほど足が前に出るのを鈍くする。だから私は、校門を少し長く開けておくことにした。開いている時間の長さは、招待状のトーンに似ている。

午後の職員室で、教頭の山田先生が古い段ボールを開けた。中には、卒業制作の木製の名札や、工作で作った風見鶏、体育大会のゼッケン、運動会の赤白帽子の色の抜けたものが眠っていた。私はゼッケンの布を持ち上げ、その布の重さが意外に軽いことに目を細めた。

「物って、軽いんですね」

「軽いから運べるんだ」と山田先生。「人は重いものを心で運ぶ。物は、軽くていい」

「でも、軽いものほど、なくしやすい」

「だから、記録する」

山田先生は、段ボールの底から一枚のカセットテープを取り出した。透明なケースに、手書きのラベル。「昭和六十三年 合唱コンクール 三年」。私は思わず身を乗り出した。

「再生できますか」

「ラジカセ、もう一台は資料室。……やってみよう」

ラジカセのボタンを押す。ガチャという機械的な音とともに、古い磁気の中から、若い声が擦れるように立ち上がった。音は途切れ途切れで、ノイズが多い。だが、最初の和音が揃う瞬間、私は自分の背筋が自然に伸びるのを感じた。声は、時代をまたぐときに少し色が変わるが、和音の入り口で“合わせる”という意味は、色を選ばない。

教頭が小さく笑った。「この学年、声がよく出た。体育の掛け声も大きかった」

私は再生ボタンの上に指を置いたまま、窓の外に視線をやった。校庭で、現役の子どもたちがボールを追いかける。遠くで太鼓の練習の音がする。音同士が混じり合っても、喧嘩はしない。音は、重なっても場所をとらないからだ。

その日の放課後、卒業生のひとりが持ってきた段ボールには、驚くべきものが入っていた。初代の校長先生が書いたという、毛筆の「校訓」の原本だった。硬い紙に墨の黒が沈み、角の部分は薄く茶色い。箱を持ってきたのは、その校長先生の孫にあたるという男性で、彼は段ボールをそっと机に置き、深呼吸した。

「家の蔵に眠っていたんです。祖父は厳しい人で、私はずっと苦手だった。でも、不思議なもので、年をとると、祖父の声が自分の声の中に薄く混じっているのに気づく。嫌だったところばかり思い出していたのに、いま見ると、この字は、いい字ですね」

私は紙の端に指を添え、ゆっくりと箱から出した。筆の運びは勢いがあるが、止めと跳ねがきちんと呼吸していて、余白が生きている。校訓は、平凡な言葉だった。けれど、その平凡さの輪郭に、墨の重さが一度だけ触れてから離れるところに、言葉の居方が見えた。

「記録祭で、これを掲げませんか」私は言った。「最後の日に、もう一度、この字の前で声を合わせる」

男性は目を細めた。「祖父が、驚きます」

卒業生の回想は、しばしば小さなズレを含んでいた。彼らは廊下の角を、実際よりも広く覚えていたり、教室の窓の数を一つ多く数えていたりした。私は間違いを

正さなかった。記憶は、少しゆがむことで持ち運びがよくなる。正確さは、測量には必要だが、帰路の手触りには不要かもしれない。

ある女性は、理科室のガス栓のにおいと、器具のガラスの冷たさを丁寧に話した。別の男性は、家庭科室のミシンの音をまねし、糸が絡まったときに先生が見せた眉間の皺の角度を指で示した。体育館の舞台袖で夏に聞いた扇風機の低い唸りは、三十年を超えても同じ周波数で胸に残っているらしい。私はノートに、彼らの記憶の部品を一つずつ書き写し、欄外に小さく矢印を引いて現役の子どもたちの「記録係」と結びつけた。匂い、音、光、温度。記憶は、科目を横断する。

やがて、「回想」は来校した人の口の中だけで行われるものでなくなっていった。手紙が届き始めたのだ。封筒の中には、折り目のついた作文と写真、時には押し花が入っていた。メールも届いた。写真に写った教室の窓辺に、見覚えのあるカーテンの柄があり、送信者はそこに矢印を重ねて、「この柄が風で膨らむのをずっと見ました」と書いていた。私はすべてを印刷し、職員室の壁に「回想の地図」と名付けた大きな紙を貼って、そこにピンで留めた。地図の上では、時間が距離を持つ。離れていた年が、近くなる。近かった季節が、少し離れる。等高線のように、回想の密度が濃い場所には丸印が重なった。理科室、図書室、体育館の舞台袖、昇降口、給食室前。地図は、学校の心臓の位置を指し示した。

私はその地図の前で、ふと、自分の回想を試しなくなった。私はこの学校の卒業生ではない。けれど、教師として過ごしてきた十数年の時間は、私の内側に別の種類の校歌を作っている。私は目を閉じ、耳を澄ませた。朝、まだ誰もいない教室で、黒板消しをパンパンと打つ音。冬、手がかじかんでチョークが上手く持てず、板書の線が少し震える感触。夏、扇風機の風がプリントの角をめくり、名前欄に書かれた字が風にさらされる瞬間の、紙の匂い。放課後、教頭が廊下を歩く音――早足のときと、ゆっくりのときで靴底の音が違うのだと、私は最近になって知った。小さな違いの集積によって、私は毎日を見分け、毎日から少しずつ離れていくことができる。

卒業生の一人が、帰り際に私に小さな包みを渡した。開けると、古い万年筆が一本、布に包まれて入っていた。黒い胴に金色の細かい輪が三つ。ペン先は細く、わずかに擦り減っている。

「先生、これ、うちの父が使っていたものです。卒業文集を、このペンで書いたんだって。インクはもう出ないかもしれないけど、よかったら“記録祭”で展示してください」

私は恐る恐るペンを持ち、光にかざした。ペン先の呼吸が見える気がした。私はインクを入れ替えてみる約束をし、布に丁寧に包み直して、胸の高さで一度だけ抱いた。「これは、書くときの背筋を思い出せる重さですね」

彼は微笑んだ。「父は姿勢だけは褒められたって言ってました」

第二章の終わりに差しかかる頃、私は気づいた。卒業生の回想は、この学校の“過去”を連れてくるためだけにあるのではない。回想に触れた現役の子どもたちが、自分の足の裏の感覚を一段強く覚えるようになる。過去は、現在の感覚を厚くするために、わざわざ遠くから歩いてくる。桂太は風上に立つ位置を変え、玲奈は匂いの捕まえ方に「紙」と「布」を使い分けるようになった。麻耶は、廊下の角で「今の静けさは、昔の静けさと違う」と言った。「昔の静けさは、気配が濃い。今の静けさは、余白が広い」。彼女はそれをレコーダーに向かってはつきりと話し、止めてもらしばらく、手の中の機械の重さを確かめるように持ち直した。

回想は、未来の言語を準備する。私は黒板の端に小さく、「未来の言葉」と書いた。誰も気づかないくらい小ささでいい。気づく人が、気づけばいい。気づかない人も、別の場所で気づけばいい。学校という場所が長い時間をかけてやってきたことは、たぶんそういう種類の配慮だった。見える人に見えるように、見えない人には見えないままでも届くように。

その夜、私はまたノートに向かった。今日、学校に戻ってきた人の名前、話した言葉、置いていった物、置いていかなかった仕事。私は万年筆の重さを掌で確かめ、インクの瓶の蓋を開けた。黒い液体の表面に、蛍光灯が小さな四角形で揺れた。ペ

ン先をそつと沈め、浅く引き上げ、紙に触れさせる。最初の一面が、わずかにかすれて、それから滑らかに線になった。かすれは、悪くない。最初の躊躇は、次の一步を丁寧にする。

——回想は、戻る道ではなく、行く先の地図になる。

書き終えてから、私は窓を開けた。冬の空気が机の上を滑り、紙の角を冷やす。遠くで犬が一度だけ吠え、止んだ。その短さが、約束の短さに似ていると思い、私は窓を閉めた。明日は第三章が始まる。現役の子どもたちの「最後の祭り」の準備が、本格的に動き出す。校舎のどこかで、まだ知らない音が生まれる予感がした。私は電気を消し、暗がりの中で、黒板の白い粉の層がわずかに光っている錯覚を見た。錯覚でよい。錯覚も、未来の言葉の一部だ。

「記録祭」という名前が黒板に大きく書かれたとき、教室の空気は一瞬、ざわめきを飲み込んで固まった。文化祭という言葉は、子どもたちにとって「遊びと本気の境目」を象徴する合図だった。だが、その頭に「最後の」と冠された途端、彼の目は、それが単なる祭りではないことを察したようだった。麻耶は黒板を見つめたまま、鉛筆をくるくると回し、桂太は腕を組んで「走るコーナーつくれる？」と聞いた。玲奈は「匂い係の出番だね」と口元を引き結び、周囲の子たちは一斉に「何を記録する？」と声をあげた。

アイディアは次々に飛び交った。

「校庭の砂の色を瓶に入れて並べる」

「跳び箱のカバーを一段ずつ触ってもらおう」

「給食のカレーの匂いを再現する」

「廊下のきしむ音を録音して流す」

「窓の光を、写真じゃなくて影の形で展示する」

どれも荒削りだが、発想の根はまっすぐだった。子どもたちにとって「文化祭」は発表の場である前に、記憶を遊びに変える装置だった。担任の私たちは手綱を引かず、むしろ放すようにした。結果として、彼らは思い出を遊ぶことで、かえって

真剣に「残す」という作業に向かっていた。

放課後、音楽室からは麻耶が録った廊下の「静けさ」が流され、理科室では桂太が砂を顕微鏡で覗いて「粒が光ってる」と叫んだ。玲奈は給食室の前に立ち、白衣の調理員に「今日の匂い、明日も同じにできますか」と真剣に尋ねて笑われた。体育館では、中学生たちが舞台上に古い跳び箱を並べ、下級生に「跳んでみな」と促した。跳んだ後の着地の音も、録音された。

教師たちは彼らの背後で静かに見守りつつ、時折「それはどうやって展示する？」「見に来る人に伝わる？」と問いを投げた。その問いは制止ではなく、次の工夫への種火になった。

町の人々も巻き込まれていった。商店街の菓子屋は「昔の購買部の味を」と揚げパンを再現し、理髪店は「校門前の朝の匂い」をボトルに閉じ込めて持ってきた。かつて給食場で働いていた女性は、大鍋を磨きながら「この金属の匂いも思い出すよ」と言った。

準備は文化祭というより、町ぐるみの「記憶の工房」と化した。机の上には紙だけでなく、瓶や布や録音機器が並び、子どもたちと大人たちの手が交互にそこへ伸びた。

そんな中で、麻耶がふと私に聞いた。

「先生、記録って、未来に届くんですか？」

私は答えに迷った。未来という言葉は、重すぎる。けれど彼女は、ただ答えを欲しているのではなく、答えを探す仲間を欲しているのだと思った。

「届くかどうかじゃなくて、届くように呼びかけ続けるんだと思うよ。呼びかけが途切れないかぎり、未来はまだ、手前にある」

麻耶はしばらく沈黙し、それからレコーダーのボタンを押した。「今の会話、残しときます」

準備の最中、体育館のスピーカーが突然壊れた。音が途切れ、雑音が広がった瞬間、子どもたちの顔に動揺が走った。しかし、桂太が「これも記録だ」と叫び、雑

音をそのまま録音した。玲奈はその音に「壊れた音」というラベルを貼り、「学校が終わる音って、これかもしれない」と呟いた。その言葉に、周囲の空気が少し震えた。悲しみではなく、納得に近い震えだった。

日が暮れると、窓の外は藍色に沈み、教室の灯りが浮かんだ。机の上に散らばった記録の断片は、雑然としているのに、不思議な一貫性を放っていた。それは「学校」というひとつの生き物の、解剖図にも見えた。

私は黒板に大きく「記録は生きている」と書いた。子どもたちは声に出して読み、笑い、真顔になり、それぞれの作業へ戻っていった。その背中を見ながら、私は、ここに集まった音や匂いが、きっと未来に呼びかけ続けるだろうと感じていた。

「記録祭」の準備が進む一方で、職員室の空気には別の重さが漂っていた。子どもたちの前では笑みを保つ教師たちも、机に向かう背中の中にはそれぞれの揺らぎを抱えていた。閉校は生徒にとって「最後の一年」だが、教師にとっては「次の配置」を含んだ現実でもある。人事異動という言葉が、黒板の余白のようにどこかに常に張り付いていた。

山田教頭は、会議で「記録祭」を提案した張本人でありながら、その夜のノートには小さく「私は何を残せるのか」と書きつけていた。二十年以上をこの学校で過ごした彼にとって、校舎の隅々にははや自分の体の延長だった。廊下のひび割れの位置、体育館のドアが軋むタイミング、雨の日に天井から落ちる雫の場所――すべてが「地図」として記憶に刻まれていた。その地図が閉じられるとき、彼は自分の体の一部を失うのではないかという不安を拭えなかった。

社会科の大槻先生は、黒板に地図を描くことを誇りとしてきた。「この山は、ここからこう見えるんだぞ」と子どもたちに語りかけるたび、線は知識であると同時に、眺めの再現でもあった。だが閉校後の異動先では、電子黒板の使用が推奨されると聞き、彼は少し笑いながらも、指先に残るチョークの粉をじっと見つめていた。

「粉がなくなると、声の調子まで変わる気がする」とぼつりと言った。

葛藤はそこにあった。時代に合わせるのか、それとも自分の流儀を最後まで守る

のか。どちらを選んでも、胸のどこかが疼いた。

音楽科の安田先生は、吹奏楽部の人数が減り続け、合奏という形が成り立たなくなったことに長く苦しんでいた。最後の「記録祭」では、部員数人で演奏をするこ
とになったが、「音が足りないからこそ、聞こえる音がある」と言い聞かせる声は、
自分に向けられている部分が大きかった。

「私は、ここで“音の残り方”を学びました」と、生徒に説明しながら、安田先生
は楽譜の余白に小さく「静けさも音」と書き加えた。

そして、私自身。国語を教えてきた年月の中で、言葉は「残すこと」と「消える
こと」の両方を体現していた。黒板に書いた詩は消され、作文は束ねて倉庫に眠り、
声は空気に散っていく。だが、それらが「なかった」わけではない。

「最後の授業で、何を語るのか」と自問する夜が増えた。答えはまだ出ない。だ
が、子どもたちに「言葉で記録せよ」と言った以上、私自身も、何かを言葉として
残さなければならぬ。それが教師としての責任であり、同時に自分への問いかけ
でもあった。

ある夜、職員会議が長引いた。話題は「記録祭」の展示の配置だったが、やがて
「教師自身は何を記録するのか」という話に移った。

「子どもの記録に寄り添うだけでいいのか」

「教師もまた、この学校の一部として声を残すべきじゃないか」

意見は割れた。

「私たちが残すと、子どもたちの声が薄れる」

「でも、私たちの声がなければ、子どもたちの声も“受け取られた”という証がな
い」

沈黙が落ちた。やがて、山田教頭が「教師も一人ひとり、短い言葉を残しましょ
う」と結論を出した。長い文章ではなく、五行以内で。黒板に書く言葉のように、
すぐに消えるかもしれない短さで。

それは決して解決ではなかったが、揺らぎを共有する一歩になった。

朝の空気は、まだ春の冷たさを残しながらも、どこか祭りの気配を含んでいた。校門にはすでに人の列ができ、色あせたランドセルを背負ったままの子どもや、白髪を混じらせた元教師たちが次々と集まってきた。昇降口の段差を踏む音が重なり、校舎そのものが「人の気配」という楽器を鳴らしているかのようだった。

玄関には大きな名簿台が設けられ、来校者はそれぞれ自分の名を書き込んだ。筆跡は若々しい走り書きもあれば、震えるような老いた文字もあり、その並びが「時間の見本帳」のように見えた。

体育館に足を踏み入れると、かつて卒業式や入学式で整列した床の印がまだ残っていた。椅子が何百と並び、壇上には「記録祭」の横断幕が掛けられていた。その文字は、現役の子どもたちが書いたものだった。少し傾いた線も、祭りの高揚を映していた。

式が始まると、最初に流されたのはカセットテープの合唱だった。昭和のざらついた音に、会場の誰もが息を呑んだ。やがて現役生徒が舞台に立ち、合唱を重ねた。古い音と新しい声が交差し、時代をまたいだ二重唱が体育館に広がった。その瞬間、涙を拭う人々の中に、笑みを浮かべる者もいた。声は泣き顔にも笑顔にも等しく届く。

展示コーナーには、砂を詰めた瓶、跳び箱のカバーの布、給食の匂いを移した布切れ、壊れたスピーカーのノイズの録音——子どもたちが残そうとした記録が並んでいた。訪れた人々はそれらに触れ、匂いを嗅ぎ、耳を傾け、しばし黙り込んだ。

「これは……私が跳んだときの音と同じだ」

「給食のにおい、あの頃のままだ」

言葉は口をついて出たが、どれも独り言のように小さく、それでいて確かな響きを持っていった。

式の後半、壇上には現役教師たちが立ち、一人ずつ五行以内の言葉を読んだ。

「粉の消える音を、今日まで授業と呼びました」

「静けさもまた音です。あなたたちと聞けた」

「紙の角がめくれる速さが、私の時間でした」

短い言葉は、黒板に書いては消される授業の延長だった。消えることを前提にしているからこそ、強く残るものがあった。

最後に校歌が歌われた。過去の卒業生も、現役の子どもたちも、教師も、地域の人も、同じ旋律を口にした。声の高さはばらばらで、歌詞を忘れて口を閉ざす者もいたが、それでも歌は途切れなかった。

歌が終わったあと、長い沈黙が訪れた。その沈黙を破ったのは、外から差し込んだ風だった。窓のカーテンが膨らみ、白い布が大きく揺れた。それは校舎が最後に呼吸をしたかのようにだった。

閉校式は静かに幕を下ろした。だが、人々の心の中には、むしろ始まりに近い熱が灯っていた。誰もが「この学校があった」という事実を、自分の体のどこかに宿して帰っていくのだと感じていた。

閉校式の翌朝、校舎は静かだった。昨日のざわめきが嘘のように消え、廊下にはわずかに花の香りと、片付けの残り香が漂っていた。机の上に置き忘れられたノート、体育館の隅に転がったボール、それらはまだ「学校」と呼ばれる場所の余熱を保っていた。

現役の子どもたちは、式のあとにもなお「記録祭」の断片を整理していた。玲奈は録音機を再生し、静けさと笑い声が交互に流れるのを確かめながら、「これは未来の人に聞いてもらうんだよね」と呟いた。桂太は砂を詰めた瓶を並べ、光の反射をじっと見つめていた。「粒が光るのは、未来にも変わらない」と。麻耶は最後の作文をノートに書きつけた。「時間は閉じるんじゃないって、誰かの手に渡るときに、もう一度始まる」と。

彼らの言葉は、子どもが未来へ宛てた短い手紙のようで、どれも確かに次の世代への種だった。

教師たちは、黒板に残した五行の言葉を再び読み返した。粉で消える運命にある言葉を、わざと残さず、消すことで未来に委ねた。山田教頭は、閉じられた校舎の

鍵を町役場に渡す前に、小さくつぶやいた。「学校は終わらない。形を変えて呼吸する」。

教師にとっての未来は、場所ではなく、人の中にあった。かつての生徒が誰かを教え、育て、励ますとき、その言葉の奥底に、かつての校舎の音が響くだろうと信じるしかなかった。

町の人々は、校舎の一部を地域資料館として保存することを決めた。壁に掲げられた「校訓」の墨跡は、最後の文化祭で披露された位置に再び掛けられ、訪れる人々に静かに目を向ける。揚げパンを再現した菓子屋は「この味はまだ売ります」と宣言し、理髪店の主人は「朝の匂いを、もう少し長く瓶に閉じ込めておきたい」と冗談めかして言った。校舎が閉じてても、町の中に散った断片が未来へと続いていった。

私は最後に、職員室の窓辺でノートを広げた。ページには、卒業生の声、子どもたちの記録、教師の短い言葉がぎっしりと並んでいる。その余白に、私はただ一行だけ書き加えた。

「学びは場所を離れても、生きることそのものに続く」

その文字を書き終えたとき、風が窓を揺らし、紙の角をめくった。まるで「次へ」と促すかのように。私はペンを置き、深く息を吸った。

校舎は閉じられたが、そこで過ごした時間は閉じられなかった。誰かが話し、笑い、泣き、書き、歌った瞬間は、それぞれの人の体に宿り、未来のどこかで再び姿を変える。

学校は消えるのではなく、渡されるのだ。

私たちの手から、まだ見ぬ誰かの手へ。

設問

問一

本文の文脈に即して、次の語の意味として最も適当なものをア～エから選べ。

(一)「余熱」

- ア 完全に消えたものの残りかす
- イ まだ温もりを含み、後に影響を及ぼすもの
- ウ 一度冷えたものを再び熱すること
- エ 熱を避けるための余分な空気

(二)「余白」

- ア 記録に不要な空き部分
- イ 意味を生み出すための空いた空間
- ウ 偶然生じた無関係のすき間
- エ 整理不足による空所

(三)「委ねた」

- ア 投げ出して無関心になること
- イ 任せ、ゆだねて責任を移すこと
- ウ 押しつけて強制すること
- エ やめて諦めること

問二

本文全体の趣旨を踏まえたとき、「学校」という存在を最も適切に捉えているのはどれか。

- ア 学校は物理的な建物としての役割を終えても、人々の記憶や回想の中で時間を保持し続ける場であり、形を失っても「学び」の象徴として未来に働きかける。
- イ 学校の価値は、その場所に残された記録や資料を後世に正確に保存することにかかっており、もしそれが不十分であれば、学校は存在した意味を失い、単なる廃

墟となる。

ウ 学校は教師や生徒という構成員がいなくなった時点で社会的な機能を失い、以後は建物としての形骸的な価値しか残らず、人々の生活と切り離される存在になる。
エ 学校は地域の施設として転用される過程で初めて未来へと繋がり、教育の場としての記憶よりも地域資源としての活用の仕方がその後の価値を決定づける。

問三

次の記述のうち、本文の論理展開に最も合致するものを選べ。

ア 「記録」は未来に確実に伝わる保証があるわけではないが、呼びかけを途切れさせず続ける営みによって未来と接続しようという考えが示されている。

イ 「記録」とは過去の出来事を誤りなく再現するための手段であり、正確な保存と再現性こそが未来に伝える条件であるとされている。

ウ 「記録」は形式化された保存活動により社会的な正統性を獲得するものであり、制度的に整えられない限り、個人の感覚に留まって意味を持たないと論じられている。

エ 「記録」は一人ひとりの感覚や体験の中に閉じられ、未来との接続を持たないがゆえに、むしろその断片性自体に存在意義があると強調されている。

問四

閉校式の後、玲奈は「これは未来の人に聞いてもらうんだよね」と語っている。

玲奈の心情を、本文の具体的な描写に即して **四十〜五十字程度**で説明せよ。

問五

麻耶は「記録って、未来に届くんですか？」と問い、教師は「届くように呼びかけ続けるんだ」と答えた。このやりとりが本文全体において持つ意味を、**六十字程度**で説明せよ。

問六

本文の最後に「学校は消えるのではなく、渡されるのだ」とある。この言葉の意味を、本文全体の趣旨に基づいて七十字以内で説明せよ。

解答・解説

問一（語彙理解）

(1) 正解…イ

↓「余熱」は本文で「閉校式の後に残る空気や記憶」として使われており、「まだ温もりを含み、後に影響を及ぼすもの」の意が適切。

(2) 正解…イ

↓「余白」は、単なる空きではなく「意味を生み出す空間」として捉えられている。本文中でも「気づく人が気づけばよい」といった用例と対応。

(3) 正解…イ

↓「委ねる」は「未来に委ねた」「呼びかけ続ける」などの文脈で、責任や役割を相手に任せること。

問二（内容理解）

正解…ア

・ア…本文全体が示す「学校は建物が閉じても、人々の記憶や学びの象徴として未来に働きかける」という趣旨に合致。

・イ…本文は「正確さだけが大切」とはせず、揺らぎや断片の価値を強調しているため不適。

・ウ…学校を「建物だけ」とするのは本文の主張と逆。

・エ…地域資料館や転用も触れられるが、「それが唯一の価値」とはされていない。

問三（表現・論理展開）

正解…ア

・ア…本文の「届くかどうかではなく、呼びかけ続ける」という主張と一致。

・イ…過去を正確に再現することに価値を限定してはいない。

- ・ ウ…制度的保存を必須条件とする言説はない。
- ・ エ…断片性を強調する場面はあるが、「未来と無関係」とはされていない。

問四（記述問題・玲奈の心情）

模範解答（51字）

未来の人々に自分たちの声や記録を届けたいと願い、記録が未来と現在をつなぐ架け橋になると感じている心情。

別解例 1

自分たちの記録が未来の誰かに受け取られることで、この学校の存在が続くと信じ、期待と責任を覚えている心情。

別解例 2

閉校の悲しみを越えて、残した記録が未来へ渡ることを確かめたい思いから、希望を込めて言葉を発した心情。

自己採点チェックリスト

- ・ 本文の具体的描写（録音や「未来へ届く」発言）に触れているか
- ・ 玲奈が感じた「希望」や「つなぐ意識」が示されているか
- ・ 字数条件を守れているか

問五（記述問題・麻耶と教師のやりとり）

模範解答（57字）

未来へ届く保証はなくとも、呼びかけ続ける営みが未来を生み出すという考えを示し、本文全体の記録観を象徴するやりとり。

別解例 1

「記録」の本質を過去の保存ではなく未来との関係性に置き、本文全体の時間観を示す核となる象徴的な会話として描かれている。

別解例 2

「未来に届くか」という問いに対して、呼びかけ続ける姿勢を答えとしたことで、本文の核心である「時間と学びの継承」が示されている。

自己採点チェックリスト

- 麻耶の問いと教師の答えをまとめて説明できているか
- 本文全体の趣旨（未来・記録・時間観）との結びつきを明示しているか
- 字数条件を守れているか

問六（記述問題・「学校は渡される」）

模範解答（62字）

学校は閉じられても、記録や記憶が人々の心に受け継がれ、未来へと手渡される存在であることを示し、本文全体の趣旨を象徴している。

別解例 1

学校は消滅するものではなく、人々が記憶や記録を通じて次世代に引き渡すことで続いていく存在だと強調し、本文全体の結論を示している。

別解例 2

学校の価値は建物や制度にあるのではなく、学びや経験が受け渡されることで未来に生き続ける点にあると述べ、本文の趣旨を要約している。

自己採点チェックリスト

- 「消えるのではなく渡される」という言葉の意味を具体化しているか
- 記録や記憶が未来に継承される趣旨を押さえているか
- 字数条件を守れているか

おわりに

ここまで大変お疲れ様でした！

最後の問題は長文を読み進める集中力、忍耐力の練習もかねてみました。この問題集を通り抜けた皆さんならば、他のどんな問題に取り組んだとしても、難しく感じるこそあれ、自分なりの答えを生み出すことができることでしょう。

今回の問題集では、大学受験における共通テストを意識して、選択形式の設問をメインとしました。制作者側の力量の問題で、共通テスト本試験ほどの紛らわしさには到達できていませんが、前段階の練習には十分活用できると考えています。本質的に国語は各自の世界観を充実させ、深化させることが科目としての主題ですから、あまり論理的な観点にこだわりすぎず、ぜひ皆さん自身の感覚を大切にしてくださいと思います。

国語や学び全般について制作者がどのような発想を持っているかは、ホームページ (<https://kokugo-senka.top/>) にいろいろ記載しています。もしよろしければご覧ください。

今後も読解問題や他の種類の問題などを作成し、個人による運営ならではの素材を提供できればいいなど検討しています。どうぞよろしくお願いいたします。

濤日荘